千寄

詩歌連俳
季寄註解

改正月令博物筌

秋之部

改正月令博物筌 凡例

○此書ハ先ヲ行ハ貝原先生述作の歳時の増補ホて洞齋翁三十年前編輯ー諸先生の訂正を乞て春之部夏之部既ヲ世ヲ流布ヒとつくも艸稿駁雜ホーて傳寫の誤もあり且時務ヲ後ヒ事少ヒ多くビたくへバ神支ヲ於ヒ洛東の新日吉四月の祭祀五月ー改ヒ八幡の安居頭今十二月ホのヒ行ヒ其外歳事の故事又ハ世俗のハ〻ヒむ一〻せの内の嘉例ヒどつつ物ホも變ヒ事多ー今般委ー〻改正ー口ホ録ヒ

処の諸家の校閲と経て板行を
故ふ改正の二字と蒙らしむ春夏
の部も此度正して是又改正の
二字を附を依て改正月令博物
筌といふものい究めて正しく誤
此昏の正しくなりうと誉めて
詩哥俳諧等給ひ故口ふ記しなく
○春夏の部い神社祭礼細字ふ
昏せる分もあれども秋冬の部ふ至
ていうべき祭礼又い世ふふるく聞
へるい皆大字ふ書き昏い見
易かりんが為ふ
○巻毎の初ふ圓形の内ふ昏さ
るい見易かりん為ふ設けるそく

七月部目録

△印い俳諧の季とする物く

○養生の法○雨風の考○米の豊凶
○妙薬○季とする祭○其外人家
重宝のこい処々ふ数多あるる
ゆへ目録これをちるさず

秋

○秋の旺する処○秋由来 発端ノ一丁
○秋の異名 并ニ註解 一丁

七月

封 月支 調子 陰陽生 七丁
並ニ註 七月異名並ニ註 二丁

日令

此部ふい七月一ヶ月日の定り
る事 支の定りろこと作す

△立秋節 △葉 七丁 △柳散 三丁
△處暑中 七十二候 七丁 六丁

朔日

○先天節 七丁 大日
△洗車雨 七丁 八丁
△硯洗 △机洗 七丁 八丁
△山城北野煤拂 七丁 八丁

七日

△七日節供 七丁 八丁
△索餅 七丁 八丁
△洒涙雨 七丁 九丁
△七夕 異名 七丁 九丁 詩哥 七十四丁

△二星 △星合 △曬衣夕 △巧夕 △乞巧
夕 △星夕 △星會 △乞巧奠 △犬飼星
△男七夕 △女七夕 △七夕七姫 △とり一妻
△七箇池 △百夕池 △乞巧針 △占蛛絲

△乳の糸△星の手向△庭の立琴△七夕ふ
借も△水の押△梶の葉△星契△星
迎△年の渡り△妻むか舟△妻こ
し舟△七種舟△天の川。異名 和名
△秋さう衣△紅葉のもし
△かさぎのもし

○七夕之文 七ノ十九丁
△七夕糸 七ノ十九丁
△七日糸 七ノ十九丁
△京都北野御手水 七ノ十九丁
△池坊立花 七ノ十九丁
△本願寺蓮花 七ノ廿二丁
△逆峯入 七ノ廿二丁
△京都文珠會 七ノ廿二丁
△六道參 七ノ廿二丁
△槙賣△迎鐘
△槙買人
△清水千日參 七ノ廿三丁
△魂迎△迎火 七ノ廿三丁
△中元 七ノ廿四丁
△盂蘭盆△盆會
△盆△施餓鬼 七ノ廿四丁
△盆供
△靈祭△聖霊祭△聖霊棚△霊棚 七ノ廿五丁
△棚經 其外供物
△蔓菁 七ノ廿六丁
△蔓菁
△解夏 夏吞納 七ノ廿六丁
△解夏坪 七ノ廿六丁
△差精 七ノ廿六丁
△生身玉△荷の仮 七ノ廿六丁
△解夏 七ノ廿六丁
△安居頭 七ノ廿七丁
△三井寺女詣 七ノ廿七丁
△水灯會 七ノ廿七丁
△施火△大文字火
△妙法火
△舟形火 七ノ廿七丁
△井火 七ノ廿七丁
△送火 七ノ廿七丁
△盛广祭 七ノ廿八丁
△經木流 七ノ廿八丁
△松崎題目踊 七ノ廿八丁
△新綿 七ノ廿八丁
△つと入 七ノ廿八丁
△鷹塒出 七ノ廿九丁
△京都御灵御出 七ノ廿九丁
△宗祇忌 七ノ廿九丁
△文覚上人忌 七ノ廿九丁
△諸方地藏祭 七ノ廿九丁
△愛宕火 七ノ廿九丁
△奪山別 七ノ廿九丁
△信州御射山穂家作御神事 七ノ三十丁

月令

此部ハ八日のさぶまつぐる七月一ケ月のこと

△摂待△門茶 七ノ三十丁
△燈籠△高燒籠△きうと燈籠
△きうと△舟ところ△花ところ△折
多疊籠△廻りところ△軒のところ 七ノ三十丁
△踊 七ノ三十丁
△花火 七ノ三十丁

△秋の扇　△扇おく　△扇をする　△團をする　七ノ卅二丁
△京都六斎念佛　七ノ卅二丁
△相撲節會　七ノ卅二丁
△ことう使　△もちまうけ　△過をこうこう　角力

時令

この部ハ七月一ヶ月時候ふりうるを紀るもの

△初秋　七ノ卅三丁
△殘暑　△のこる暑さ　七ノ卅四丁
△餞暑　七ノ卅五丁
△稲妻　七ノ卅五丁
△秋の初風　七ノ卅六丁
△秋涼　△新涼　七ノ卅六丁
△初嵐　△初暴風　七ノ卅六丁
△冷し　七ノ卅七丁
△二百十日　七ノ卅七丁

草木

△萩　△糸萩　△白萩　△小萩　△藪の鶯　△秋いらの萩　七ノ卅三丁
△楓　△青楓　七ノ卅八丁
△楸　七ノ卅九丁
△柞　七ノ卅九丁
△檀　七ノ卅九丁
△櫨　七ノ卅九丁
△木槿　七ノ卅丁
△朝貞　七ノ卅丁
△秋海棠　七ノ卅丁
△玄及　七ノ卅丁
△桔梗　七ノ卅一丁
△沢桔梗　七ノ卅一丁
△蘭　七ノ卅一丁
△建蘭　七ノ卅二丁
△女郎花　七ノ卅二丁
△茶の花　七ノ卅三丁
△仙翁花　七ノ卅三丁
△觀音草　七ノ卅三丁
△翁草　七ノ卅三丁
△弟切草　七ノ卅三丁
△益母草　七ノ卅三丁
△鳳仙花　七ノ卅四丁
△旋覆花　七ノ卅四丁
△野菊　七ノ卅四丁
△やゝこ花　七ノ卅四丁
△曼珠沙花　七ノ卅四丁
△常山花　七ノ卅五丁
△頼桐　七ノ卅五丁
△蓖麻子　七ノ卅五丁
△渋柳　七ノ卅五丁
△茗荷の花　七ノ卅五丁
△尉金花　七ノ卅五丁
△薏苡　七ノ卅五丁
△蒲萄　七ノ卅五丁
△紫葛　七ノ卅五丁
△桃子　七ノ卅六丁
△木瓜実　七ノ卅七丁

△槐花 七ノ四十七
△蓮子飛 七ノ四十八
△刀豆 七ノ四十八
△夕負実 七ノ四十八
△青瓢簞 七ノ四十八
△西瓜 七ノ四十八
△いなご 七ノ四十九
△束 七ノ四十九
△栗の穂 七ノ四十九
△稲葉の雲 七ノ五十
△稲の花 七ノ五十
△富貴花
△早稲 七ノ五十
△早田の稲
△室の早稲 七ノ五十

生類

七月の生類ハ八月の中の八月又九月ハ用ゆる物

△初鷹 七ノ五十
△小たか狩
△初鷹狩
△鳥屋打 七ノ五十一
△荒鷹
△鳥屋勝 七ノ五十一
△鳩吹 七ノ五十一
△秋の蝿 七ノ五十一
△秋の蛙 七ノ五十一
△秋の蛍 七ノ五十一
△秋の蚊
△溢蚊
△殘蚊
△蚓蟈 七ノ五十二
△蜩
△寒蟬 七ノ五十二
△秋のてん 七ノ五十二
△蜻蛉
△キヤンヤ
△アキツム
△田畑虫送 七ノ五十二
△蟲
△虫の音 七ノ五十三
△虫の声
△赤卒 七ノ五十三
△赤ゑんぐり
△虫撰 七ノ五十六
△虫合 七ノ五十六
△虫尽 七ノ五十六
△虫籠 七ノ五十六
△虫賣 七ノ五十六
△蟲虫 七ノ五十六
△月鈴虫 七ノ五十六
△松虫 七ノ五十六
△蟋蟀 七ノ五十七
△促織 七ノ五十七
△蚣蝑 七ノ五十八
△竈馬 七ノ五十八
△稲虫 七ノ五十八
△阜冬蟲 七ノ五十八
△樵虫 七ノ五十八
△蓑虫鳴 七ノ五十八
△馬追虫 七ノ五十九
△稲つき 七ノ五十九
△藻鳴虫
△藻虫の音
△蚯蚓鳴 七ノ五十九
△蟷螂 七ノ五十九
△常山虫 七ノ六十

必用

七月一ケ月。養生。天気。衣服の式等要用のこと知しるす

- 楽事　六十丁
- 日刻　六十丁
- 天気占候　六十丁
- ○萩かさね
- ○花もくき
- 養生　六十丁
- 破軍向方　六十丁
- 方角　六十丁
- 衣服の式　六十丁
- 女の衣服　六十丁

飲食

七月一ケ月の食物一切料理こん立等とゝしるす

- 焼米　六十丁
- 切麥　めゝる麦　あゝ麦　六十丁
- 七月料理献立　七料一丁

月令博物筌秋之部發端

鬼を肉ふ骨ゝるい秋の気の旺とる分ゝり

礼記の直ふ曰秋と小陰一ケ其気ゆ成月四陰ふ至れい陰ととふ盛ん陽なくろへ陰さうあると以て秋ゝ寺人陽ゝろく陰さうあると以て老ゝ寺ことゆゝ秋い養生ゝ寺ことゝると以て時令ふ順ふしもゝ

秋由来

漢書律暦志ふ曰秋ハ揫物揫敛ゝいむさゝる成熟ゝる也とゝろ秋ゝ義ゝり○和語ふあゝく訓ゝる事い陽氣去ゝて天色さえゝれらゝゝゝふとゝゝり」又一説ふい緋ゝゝゝ心ゝて草木の葉いあゝく木の実も色づくゆゝゝゝゝ○方と西ゝゝゝ秋を西郊ふむゝふゝゝあり易通

統圖に日西方の白道をゆくこれと西陸といふと見えたり

和歌に秋の方角を西とよみたる例は古今集藤原勝臣の歌に

哥 ねぬ夕ぬとこなれて社あらはれ西の空ぬ秋のうらかぜ

とよみたり○精は白虎とは淮南子に西方は金にその獸は白虎とあり○人は義なりとは淮南子に秋と矩とは矩は万物をたゞしくゆるゝ義は成なり成は方也て物の角あるかゝちにて人に於ては義のある心なり○天は昊天とは元帝纂要に天を昊天と有て註に昊は愍なり万物の彫零そこなはるゝ愍むべしと見えたり○卦は兌とは易に兌は正秋也とあるにより○氣は小陰とは因の上○臟は肺とは人身の肺を

五臟の花蓋として上に居し金に屬する故に秋に配當するなり医昏に見えたり○色は白とは礼記に其帝は少皞とありて註に少皞は白精の君金天氏なりと見えたり○味は辛とは礼記に其味は辛し其臭は腥し有て註に辛腥は金に屬すと見えたり

秋異名

白藏○素商○秋氣○欽○金德○短晷○商應○五政○木落○陰中○金勁○西灝○金行○土感○菊時○蓐秋○爽籟○少皞○收成○金商○朗景○明景

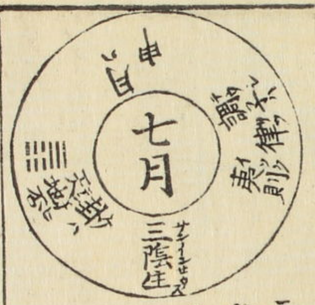
異名註

白藏とは白は秋の金色藏は收藏なり爾雅に出○素商とは云は素も白なり商は秋の律なり○素秋も此理なり元帝纂要に出○揫斂は揫は斂なり○金德は盛德在金とは月令にあり○短晷は

うゝ日陰く○商應い潘安仁が詩に出
○五政い管子に出一曰博塞と禁と二
曰五兵の刄と見る事なり三日旅
農と慎く聚收と趨せよ四日鈇
なりと補ひ折うゝ寒げ五日墻垣
を修ち門閭を周ふせよ己上五政
○木落い木葉落るゝ楚辭出○陰
中い前漢書律曆志に有○金勁い景淑
が秋賦ふ金気方勁くあり○西灝
い前漢書郊祀志に出○金行い德
さうふ行くゝ○士感い文
夫秋ふ感ずしゝふ諺ふようゝ○
菊時い時とさすゝ
つまり扨るゝり○奕籟いさやうな
る秋の声ゝ○少皡い秋の帝ふ配す
己上元帝纂要ふあり○収成いむさ
ちゝ○金商い金い秋の德商い秋
ゝり○朗景○明景ゝる秋の景色ゝ
○右の外秋三月ふ渡る季の物
い別ふ三秋の部あり

七月之部

△此印の分是ゝ非諸の季寄ふ用ひ来る物ゝ



三陰生ずとい秋
い陰の初まる故
ふ孟秋ふ於て天
地初りて肅すと
いふ肅いりめ
ちぐまる心と身を
ほしむべき月ゝ

○律を夷則しゝふい夷い傷ゝ万物
始て傷ゝ天刑をかふむるゝ前漢書出
○卦い天地否といふい夏の三陽
上ふあり秋の三陰下ふあり象

七月異名

△孟秋礼記出△上秋韻府出
△學秋纂要△首秋韻府
△新秋韻府△早秋同△蘭秋事物異名
△開秋同△蘭景同△相月△孟
商同△夷則月同△湘月留青米珍
△蘭月同○相秋同△秋初同△商
節韻府△爽節同流火同△初
秋纂要△盆秋△涼月同昏ニ出

和名 △文月 奥義抄 △ふ月 同 めであひ月 秘蔵抄 なゝよ月 莫傳抄
△おミなへし月 蔵玉 七夕月 同 ふミひらき月 同 あきそ月 莫傳

異名註 △孟秋とハ孟ハはじめと云字なるゆへ △上秋ハ三秋の中にて七月ハ上にたつ月なり
△肇秋ハ肇ハはじめといふ義なり
△蘭秋 楚辞ニ出 秋蘭を紉て佩とことあれバとりていへるなり
△開秋ハ開ハひらくと云義にてまづはじめて秋にある月といふ心也
△蘭景これも楚辞の秋蘭の故事による
△首秋ハ首ハはじめといふ義なり
△孟商 孟ハ初の心 商ハ秋の義也
△瀟月これも楚辞に此月瀟君をいへるをとりてあるゆへなり
湘君ハ舜帝の后なり
△夷則月 夷則ハ律の名也 呂注にあり
△盆秋ハ此月盂蘭盆會をなすゆへ

△涼月ハ礼記月令に孟秋の月涼風至るといへるによりて名づく

和名註 文月とハ七夕に借をとりて色々の文をかくゆへ文ひらき月といふを畧して文月ともふ月ともいへるとぞ 奥儀抄ニ出
○ふ月とハふミ月と約ていふなり
○めであひ月とハ牽牛織女二星がひに愛あふ月といふこゝろなり
○なゝよ月とハ七夕のことなり
△おミなへし月 下に云る奇説にてそのころはなびらくるに見えたり
○ふミひろげ月とハ七夕にかすとて書物をさらすこゝろなり
○あきそ月とハ秋の初めを約て云也

(歌) 秘蔵 めであひ月
七夕のそでくあひ月待えては いふかのうれしかるらん

蔵玉 七夕月 家隆
鵲のちりえの橋もこころでよ

七月の こころもちえらび

会 ふるひ き月

七夕の 夜ぬきのかぎえて

かぎ〳〵 へる久ひさき月

萬傳 秋初月

風すゝ〳〵 ふきそうつもむ 秋うみの

秋の初月 月 わかふうゝ 色

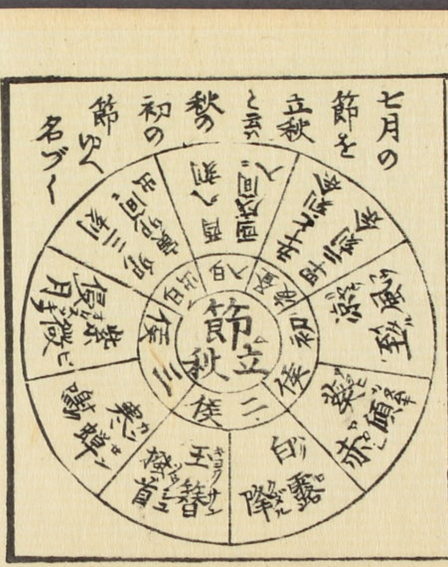
藏玉 ときえくゝ月

七夕の 名ぬれをかくくてや

名とえゝ こもとえくゝ月

立秋 節の名○七十二候○草木七十二候○

昼夜長短○日の出入等 左の記を



○涼風至る 此天地の仁気散じて殺伐の気おこるはじめ 葵もかたびき

て赤くなりぬ

○白露降る 秋の陰氣夏の陽氣に乗じて気候まどろ

礼記の註に見えそう

○玉巾花 僧とこと花と極と云

○寒蟬鳴 暑中に生じる蟬

の聲 衰 変 とゝいふ

○紫微月 月を侵とゝ紫微星と

いふ月 位 月ふちうがくと

れ 手 とゝいふ

立秋 七月の節 然 和

哥連 七月朔日

○初秋 秋立て三五日 ころを

よむべし 奥の時令の外

ある を 初秋の題 立秋の心

とよむ 立秋の題 初秋の

ちろ

(三) 夫木 立秋 定家

夕べふくとは秋のとり音の山おろし
涼しくひゝく風の音かな　後鳥羽院

夫木

吉野なる夕べうみてふく風は
あれのゝもとうゝきせぬなり　御製

亀山　立秋朝

朝のまに水鶏鳴き渡る夜の
ひとよふせしも秋のゝ風　為世

千首　立秋風

秋ふかき夜の音吹くなりやは
いつゝゝうれや秋のゝ風　師継

同　立秋曉

みなもきして鳴くもあくれば秋の空
あうつきうみて秋いまふく　重政

千載　社頭立秋

秋山の松ふく風もなれぬれば
いろいかはりて涼しきかな

(同)　ゝゝの秋　○家の秋　○ものもとむる
○ゝる　○家　○相の家落る　○まゝ
入まゝ　○今秋のゝ風　○和秋風

ゝゝの秋　ゝゝの塚　○秋の月　ゝゝの扇
○ゝゝ色　○今和ゝゝの扇

(連)　ゝゝ　ゝゝ　秋風のきのふ　秋　東祇
ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　紹巴
ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　宗長

(俳)　ゝゝの文月　直正
ゝゝの秋　乙由
ゝゝの秋　十ナ

詩　立秋五字對句　同上

詩　立秋七字對句

好雨天邊落　金井落梧桐
新秋水操清　涼生一枕風
秋暑困人仍御扇　爽気浮
晚風生竹却添衣　入清商
迎秋日色簷前見　望白雲

入夜鐘声竹外聞・夜来秋

(詩) 立秋詞　明　龔最

烟雲・黯淡・仲宣樓・荏苒年花・逝水流　ケムリノ色モ雲ノ色モウスサヒレウナツタノヲタカトノ上カラミエル〇モロコシノ仲宣ト云タ人ガ賓客ト成ニサカモリシタソノタカトノヲ仲宣ガ樓トイフ故事ナリ〇荏苒トウツリユク月日ハテウドユクミヅノナガレノヤウナルモノヂヤ・白雲・郷山千里外・滿城風雨又新秋　カレラノシラカニナルニデ故郷ヲ千里モヘダテ、タビノソラニブラツイテ井ルモ二此処ノ城外一面ニモノスゴイアメカゼガオコルトオモヘハコトシモ又ヘツアキニナツタノジヤ

立秋故事　戴楸葉　唐ニ女童楸ノ葉ヲ色々ニ切テ花ノカタチヲナシ今日カザレニイタヽク也日本ニテ柳ヲカケ菖蒲ヲ髪ニヽクニヒトシ夢華録ニ出タリ

〇日本ニモコノ事往昔アリシトゾ

立秋故事　一葉　一葉知秋　合言故事ニ出　一葉とハ桐のことなり

△桐の一葉△一葉散△桐の葉落る　右いづれもおなじことなり

〇淮南子ニ曰梧桐一葉落天下知秋トイヘル事ヨリ出タルナリ

〇程明道ノ詩ニモ

(詩) 井梧一葉報秋聲トモ作レリ

〇遁甲書ニ曰梧桐立秋ノ日一葉先ヅ落トモイヘリ

(句) 夫木　うつくしく秋風やまりあの周辺にふられちらりん　國夏

(連) 木枯ろよりけの秋立一葉かな　宗牧

風ふかてそれとなく秋の一葉哉　紹巴

(俳) お座つ文隅へ飛す桐一葉　移竹

(狂) 涼しさ秋をさてやるさ月れ風の一葉のちらしあり　貞徳

立秋故事　△一葉舟　小補韻會ニ黄帝浮葉ヲ見テ舟ヲ

ワクルト云故事トロニシルス淮南子ノ一葉落テ天下ミナ秋ナリトイフ事トヲトリアハセテ季トシタルモノナリ

（芳）廣沢の長孝ゝ七夕の歌

天の川ながれくやしの城風よ
ちゝや一系のつゆむくへ舟

（俳）物の氣て送る一系や敬舟直正

立秋故支

柳散

此ゴロチリソムル故ヘ柳桐ノ類ハ早クチリ初ルナリ○事文類聚ニ晉ノ顧愷之ガ詩ニ蒲柳之質望秋先零ト云フ語ヲイダセリコノ故事ニヨリタル詞ナリ

立秋故支

一葉衣

是ハ口ノ一葉ノ故事ニ二重ノ衣ヲ取アハセタルモノナリ

○右一葉の事ようつゞきも立秋一日ふかぞろこゝてもあゝ初秋の事にゝても然るべし

立秋天氣

立秋より北の風そ東稲よ実入らす○又蒸あれハ秋収よ悪しゝ○夜ひやゝかなれハ大風なしゝこれを夜北と云なり昼あつく残暑つよく夜なれてをこゝ夜北吹ハ中にをひて日和よく出けるく稲ふ大きくよゝ○南風にくゐめたあつさハ雨ふる○秋季ハくもはやゝ多く出ても風出さきハあるふるゝ○朝ごとにひゞれ方赫々ゝとかくやけきゝ陽気のさゝんきうゝ南へ赤ゝなれハにをひて日和よ○朝天雲のやけふハ二三日のうちふ雨ふる○夕やけ北へまゝれハ雨ふるゝ南へまゝ雨ふりちやく遍るも又雨なり○朝の虹ハ西よ見ハ三日の内ゝ

雨ふるなり暮のあがりひぐにあ
ま晴ふる○朝夕くもにあぢの
真直ふるとかく之と蜺虹と俗
ふりかかるしに大風ふるるのく

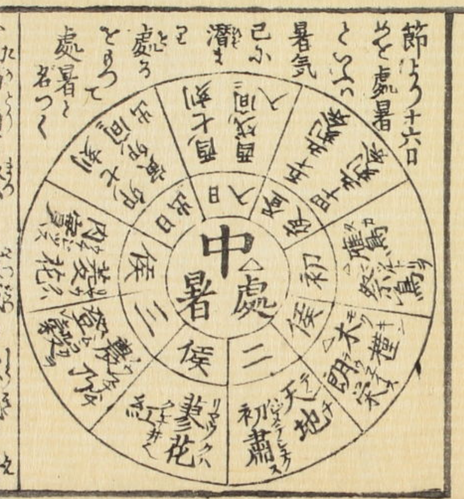
立秋　雲氣　白雲東南の方より出て空ふきこの風と伊勢東風と云
風ふるこの風と伊勢東風と云
○西の方より東のかくへ行くい
西南西北くりふ日和よく○黒
雲天の川とふるげの風雨あるく

(三)　千首　初秋雲　爲尹

ふりいまさ村雲まぢいかれるも
あれのあひのうきやれ
(俳)　足卷と鶴よりはよく秋のもの季吟

立秋　妙藥　立秋の日西ふむりいて
赤小豆十七粒或十四粒
を井花水にて呑い秋中赤白痢
病とるぐふ事なし

處暑　中名〇七十二候。草木七十二候
〇昼夜長短〇日の出入左記す



節ふる十六日を處暑といふ暑気已ふ潛て處ろとりて處暑名つく

△鷹鳥を祭る殺伐の秋氣を得て鳥と捕う沢の四面ふるぐ置い祭とるふ似くう是と鳥と祭るしいふ獺の魚と祭ふるど

△木槿朗栄をくへむくげの花咲ぢる催しにて菓子ぐもちげるをいふ△天地始肅い天地の気秋ふるうてそで色てあぢるとく

△蓼花紅いたでの花さくしも也

△農乃登穀といい此月農人う五穀の初穂と天子へをめ奉るく是ふうて天子新と嘗むと礼記

見えそう本朝新嘗會も是ふたり
○菱花内実なれ実でなるうり

日令

此部ハ七月一ヶ月日の定りなること支の定りなることを記す

朔日　今日風雨あれい米の價貴し
○南風あれい米粟大ふ

先天節

今日聖祖降誕の日ゝ依て名づく　事物異名集出

朔日　江戸　○本所羅漢寺五百羅漢供養施餓鬼あり

朔日　信濃　○下諏訪明神秋の宮祭り委しくハ年中行司綱目ハ出す

三日　京都　○鳥羽院御證月御忌今日ハ竹田村安樂壽院ハて行ふ

四日　伊勢　○栢流しの神事。植竹ゝ云昔ハ土貢島ふ栢と棒げふ神事ハ風の宮ゝて行ハる栢の浮んで流る時ハその年豊年ゝ栢のもづゝるゝと凶年ゝゝ

五日　京都　○建仁寺開山忌。諱ハ栄西千光國師葉上坊僧正ゝ云
○高臺寺施餓鬼什物出る。四条二条河原七夕手向の笹流し

六日　洗車雨　六月ハ降る雨ゝゝ七夕の車を洗ふゝ云事ゝゝ

又日本歳時記ハ歳時雜記見ふ

六日　城北野煤拂　北野天神の社今日内陣ハ納めある神宝を外へ出して虫干ゝ其間ゝ内外の陣の煤ゝゝひゝるゝ

○諸谷北野御手水六日ゝる煤ゝゝひ七日ゝゝるゝ誤ゝる

六日　硯洗　机洗。京師の児女今日硯机を洗ひ清め芋の葉の露ゝゝ硯の墨ゝ七夕の手向の詩哥ゝ書ゝ供ゝる

ふふゝゝ什ゝ方の出かしハ
ゝゝそ半のむゝゝゝゝを寂阿

七日　○西南の風と金風といふ米実少し　○雨ふれば八月ふ洪水あり但し小麥・麻・豆のふ價やとうしぜ

△七日節供　今日内膳司より當日の節の供御を献ずとそなへて供御い毎日奉る物なれども一年の内節々奉ると節供といふ　○七い少陽不變の数なり故ふ當七日い本朝五節句の一にして祝ふこと日本紀江次第公事根源等其外諸書ふ出て歴然たる式日なり俗二星の祭りふかくなりて公事のぞ日なることを忘れしふ似たり

△索餅　昔高辛氏の小子今日死す昊鬼となり人をやまず常に麥餅を好むこれふよりてこの麥餅を供じて瘧疾をまぬかれたり十節紀ふ出たり今日の節句い瘧を除く為也と云ふ此ゆへや今日親族索麺とたがひ又索麺を食ふなり索餅といふ索麺のことなり麦索もいふ風俗考に出たり

△生花式　撫子・桔梗・槿・萩・葛・尾花・藤袴

七日　△洒涙雨　七夕の雨をいふ牽牛と織女と別を悲しみ涙をそそぐその雨なるよし唐土にてぬるくいひ

△星合　△嚏衣夕　△巧夕　△乞願夕　△星夕　△星會　△乞巧奠

△男七夕異名　牽牛星経　河鼓ふ雅　牛郎子平大全　牛星晉公洛禄

月和名　△彦星和名抄　△犬飼星月令

聚天中記等ふ出たり

七日　△七夕

牛ひく男〜 歌林抄〈男七夕

〈七夕異名〉織女星 經天孫 柳文

星娥 詩学大成 天娥 宋詩選

天嬪 同上 〈女七夕

〈和名〉たなばたづめ 古今集〈とりつまき

○七夕七姫〈いろいろ

〈朝良姫〈梶の葉姫〈百子姫

〈薫物姫〈さゝがに姫〈秋露姫

〈糸織姫 已上を七夕乃七姫と

いふなり もゝかぐに出そう

○又七夕七姫の一説 ○槿姫○梶

の葉姫○秋天姫○琴寄姫○灯姫

○糸織姫○篠蛉姫 已上和中集の説

○證哥い名数和哥選といふる昏

ふ出るゆへ暑之右名数和哥選い考

と多くあれ共哥のこゝ後とい

絵ふあ〜ひよくこゝろ〜に秘

受口傳とのゝる故初学の人を

見て大ふ便りふるる昏なり

○七夕祭を乞巧奠といふこれ巧れ

たゝとゝとして女の手ゝぞの器用

ふるゝ〜れ乞ひいのる事なり奠

いまゝ〜とよむ字なり 日本紀

天平勝宝七年ふ禁裏にて初

て行る先御殿の前ふ白木の几

と立て〜立琴〜そ十三絃の箏と

呂し律の調子ふ合して拍とそ

凡某の類とゝ〜べ竿のもれ五

色の糸とうけ〜れたらいよ水と

け〜へて二星の影をうつ〜香花

ともゝゝへ祭らるゝよう〜 江家

次第にも委〜く記されそう

○唐土ふも此夕ハ婦人あつまりて

五綵の糸を以て星の影ふむらひ

て七ツの針のゝ〜ぞ孔をとゝ〜庭ゝ

瓜ぞ〜りのとそゝるへて巧と乞祈る

ふ蜘蛛ぞ〜れとゝるへるゝさりの

上なさるゝこゝ〜ひいとゝ孫ぐひのゝる

ゝ〜とする上 荊楚歳時記見そう

○今世今日児女子竹の枝ふ短尺と

たくるい和哥と手向るまゝ〇いはゆる和國の風ハ竹の葉ホ糸とうけて祈る意

△とり妻　逢ふ人の名づるこそ又万葉ホ

(哥)やちゝせの神の民代ゆ乞願人もうれゝ若んとゝ人ハ入九

又灯火姫ゝもいへり證哥名

数和哥選ホ出ゝ

○故事詩哥次ホかゞく出す高

又天の川ハ川もそゝ小星の

あつまゝる月七夕の由来

其外和漢の故事詩哥等委

しく日本歳時記又ハ銀河抄

等ホ出すれゝ〇ゝもこゝ

△七箇池　△百箇池ゝも〇七ッの

盥ホ水とゝまて星の

影をうゝをゝ

(哥)新古今　長家

ゝゝ乃ゝくゝもむへゝ宿の池ホ

やゝ今の新もやゝうれやゝん

夫木　右京大夫

ゝゝやゝ二つ月ゝの物ゝゝ

たゝゝゝのゝふゝゝゝまゝゝゝ

(俳)ゝゝの盥ホ水や妹脊山　因元

△乞巧針　婦人七孔の針ホ色々の糸をゝとして七夕ゝたむゝゝ

(哥)千五百番哥合

ゝゝそも打ひ木の紫ゝゝや

結ひゝゝめゝゝゝの糸

△占蛛絲　婦人瓜茄子等ゝ供へ祭ゝ次日早瓜の上ホ蛛れ巣とひゝたれゝ塊

ゝ得ゝゝ

△願の絲　五色の糸と竹の葉ホ手向るゝ

(詩)願絲七字對句　詩礎

虚無天・上支機・石　穿針時

昔張騫ト云人ガイカタニノツテ天ノ川ヘイテヨク女ノ人ヲアモリ石ヲモラフテ支ヘ云人前ヲ看ニ三名所ヲハウヲヲイヒヤ　ハリノミヽズニトヲトヲストキ

信有人間乞巧絲　願絲斜

人間世界テコヒ子ガヒノイトニハリヲアヤヲレテ婦人ガオモヒクニキヨウニナリタイト思フノハ二コト二今モアルコトニセヤ　ナガイノイトガスヂカヒニ三ル

△星祭手向　燈火其外何とても今日星ふ供する物と云　常盤井入道

(三)　夫木

向家の玉祭をとてのよ向ーて
庭にかゝる秋のとまりひ

△庭の立琴　(三)　夫木七夕のあゝ

秋ふ庭ふをく琴の
あくりにもくいそくなのいと　寂蓮

(能)　立琴や家に志ろしの糸ふ菊乙

△七夕ふ借　手懸りとして七夕ふ供ずる物
をかすとい山中にも
いろとゝに衣をかあまとゝて是
とも手向ーなるう

(三)　後撰　ぬきあ衣ゝ祭ゝ押ゝて
七夕つゝふゝとものゝ　なふ　慈圓

△水掛草　貞徳の説よい水影
草い多くい七夕ゝ
よゝゝ。水掛草も稲のゝるゝ
稲い水ふ影のゝゝるゝの故水影
草と号ゝく尚又盆の奥ふも記ゝ

(三)　延文百首　賢俊

七夕乃結の契り
あゝ多ゝ芝の家もゝゝし　ハあゝの川

△梶の葉　七夕ふハ七枚の梶乃
葉ふ手向の歌とか
ゝ五色の糸にてまゝて屋の上
ふあゝ乞ゝものゝるゝ　中院通
茂公の御説ゝゝ　溪雲問答三出

(三)　夫木　入道前大政大臣

かゝゝにゝる梶の七ゝふよゝゝこと
行あゝゝ　ゝる秋のゆゝゝ
新古今　七夕のゝゝゝる私の梶乃葉ふ
いく秋ゝ行つ家の玉つゝ　俊成

(連)　梶ゝゝ変れ家ゝゝ　(能)　梶の葉や葉ふ流ゝ　家ゝ移水

(狂)　梶の葉ゝ　家の棹ゝ
星のいゝゝ小清水ゝゝん　魯石

○一説ふ梶そいすゝ楮そ紙を造る木の葉ふ哥をかくなり

△星契　牽牛と織女と年々今宵の逢瀬を契約する心を

(言)草庵　彼の中も咲よりかゝる花風と数ゝしたのむ星合のそゝ　頓阿

△星迎　織女牽牛とまちむくる夜といふ心なり

△年の渡　一年ふ一度天の川と渡りそ牛女の逢ふるゆゑ　ゆゑ乃ゝ哥にもよりゝ

(言)続拾　ふ[illegible]　隆康

△妻迎舟　織女ゞ牽牛とひいふ出る舟といふ心なり

(言)白川百首　顕朝

[illegible]星のつるむゝ舟のふゝ[illegible]

(俳)一説やさかな姫と迎へ舟是等

△妻乙船　牽牛乃乗りて来る舟といふこゝろ

(俳)日も多ゝ[illegible]舟ふの[illegible]女七夕知春

○星の契より此外そい哥の詞へ

△七種の舟　草花そ舟とかざりそ七夕を祭るなり

○萩、あさゝふ。尾花。葛。女郎花。ふぢばかま。撫子。これと秋の七種とす

△秋さり衣　彦星の着てとゝ

(言)万葉　七夕のいなとゝ立て物布の秋さりこゝろもいれりうん

夫木　七夕のいなとゝ立てくる衣の秋さり衣ゆうそゝ　赤人

△天河　(異名)銀漢　韻府　天漢　同　星河　詩学大成　明河　支天漢　梁何遜詩　銀潢　雞跖集　雲漢　唐詩記

(和名)あまの川　今あまのかゝ　日やと川　亜玉　星のやとゝ　四季物語

(ろ) 新勅　後二条院

ふるあらい川清くなる天乃川
ふるてまつの月の秋の夕雲

連 波さえ雲やいくせ天の川　宗祇

俳 セッそふ向ひ清れつ天の河　珠林
むさう咲ふ々くて細しての河　珀洲

系中ひとそうまして嶽一瀬の超渡
浮もの芥流るやうたれの　牛雲

狂 そのかしつへいさ浪うつを天の河
玉のさうろきはし合の点　紫若

詩 銀河詞　杜甫

常時任顕瞬秋至最分明
云モノハツ子ニ見エタリ見エナンタリシテ
モ気ノツカヌモノヒヤカアキニナルトキツウ
アキラカ二見エル

縱波微雲掩終能永
夜清カノアマノカハガムラ雲ニオホハレテモツイニハヨドヲレニキツタリ
ト見エル

含星動雙闕伴月落
遼城ソノアマノ川ガホシノヒカリヲフクンテハキシリノオシナガメ比
ナリ月カゲニツレテハ辺鄙ノ地ニモ見エワタルト

牛女年々

渡何曾風浪生　牛織女ノ二ツノ星ガアイ年ヨノ天川ヲワタレ比下界ノ川ヲチガフユニ凡ヤナミノオコルコトハアルベイ

紅葉の橋

(ろ) 草庵　次の詠あり　頓阿

今日ハよも雨ふさらしたれの河
くれゐ井ムるあやうん

烏鵲の橋

かさぎのはし　橋○織女ハ天帝の女牽牛と夫婦して後機を
ゆるゝ紙れてゐるゆへ天帝怒
りて其中をさの河を乃ぐて
住しむセタふ一度會事をゆるす
烏鵲この橋しなりて織女を
越さしむるといふ事うるはん
もなくれこの橋ふてうて紅
涙と落すこれふるて紅葉の
橋ともいふ俗諺うて
信用をふたぐばをぞふ博物
筌ふ和ど○かさぎのはし
をれ種類なり

(百) 夫木　俊成

七夕の雲えぬ契りを添んとや
[illegible]

(能) 雨後かさねて　かづく いづます

七夕の歌詩連能

(百) 六百番哥合　家隆

[illegible]

夫木　爲家

[illegible]

永久百首　七夕後朝　兼昌

朝風に川波さわぐ一夜つる
[illegible]

家集　海路七夕　經信

[illegible]

天の川波のうちにそもれ

新續古　待七夕　洞院摂政前左大臣

天の原そこゝ[illegible]河のまとり

あれはよいあいをとゝ[illegible]

續古　七夕別　家隆

[illegible]

續千　閏月七夕　前中納言定房

[illegible]

白川七百首　二星適逢　俊成

七夕の逢ぬ後いさゝ[illegible]

哥合　閑思七夕　貞継

八重葺[illegible]

白川　七夕契久　御製

七夕の天の[illegible]

(詞) あふよ。年に一夜の[illegible]

七夕の[illegible]

天ニハ星合の空○行合の空○初秋
の空○夕づく夜○月の舟 風ニハ七
夕の神吹くとも 雨ニハ七夕の涙の雨
○天の河あまのかはらもあまの流れさし
雲ニハ雲の衣○雲のかよひ路 年ニハ
年のわたり○としにひとわたり○年よ
ね夜のちぎり 天河ニハうひせあまの流○八十
流○渡流ふむ○河流○河長○河と
舟ニハ渡まむく舟○紅葉の渡舟○かぢ
へさの舟○天の川舟○やそのわたし舟
○月の舟 橋ニハ紅葉の橋○かさゝぎ
の橋○たなばたの玉匠 夜ニハみじか夜
枕ニハ天の河原に岩まくら 床ニハあふ夜
の床○玉床○藍うちちらふ 衣ニハか
せる衣○天の羽衣○秋さり衣○
わかれ衣○雲の衣 糸ニハ秋のいと
○竹の葉に結ぶ糸○七夕のいと○七
夕の手向のいと 梶の葉ニハ梶にかく歌
のえ 夕ニハ昼間といそく○夕ほく夜
暑ニハ立まちてそ○暇乞○契立てやよ

寄 浅からぬくれ七夕の朝なるの寄ニ 又
て七夕にわの声て手向りかり又七夕の歌
ふ足 玉織さ 寄の玉つき七夕 機 衣又七
そくし にて向るとあり
夕の舞もく とめしひ 扇に火をとまて 浮木
なそくとあり 手向るあり
天の川にかける 神代 神代のうらくとあり
うたとあり 七夕のそれ一夜と神
代より契める 萩 もみのまきと七夕のと
をうしむとあり もろくきくく
又かけて手向る とざる 七夕まかせる衣の紗
くろもよあり に見立てかけてれひけ
ろむ 葛 くつの まじにぬる秋の常夜と
とも
よ字にかけ 女良花○荻も色にあまさ
たとありあり
ろ涙 行き七夕の こぼれうけ妻 天の川
七巻あり
きこと 機の衣のまかひ くものすかるに
あり さうかは人の
るるまうせとしいろされハ七夕も
まかハへのふる秋としたのまれとえ そそ静る
むし 七夕の衣を 織て手向えかゝると やうあうす とまあり

(連)たなばたの渡しの舟や流れ秋 行助
夕月や仲立天の川 宗祇
行合のわらや銀河の天津星 宗碩
行きかえや七日に星のあう方衣 心敬

星合のうつろふかこそ其の義　宗牧

俳七夕ふかうひいらと結合ひ　芭蕉

鵲や丸太の上うすの川　晋子

及ばぬ古郷て流るゝ星祭　十丁

寝まのうかぶ歩りや女七夕　才麿

天ひや乾世ふ蔵る天の川　露橘

朋点う条りて星の別る　二柳

光ゝ合ハ星や幾世ぬ立ち　立圃

星合のかゝぬ名や飯と汁　移竹

夫婦し織機の七夕やなるる　臭佐

狂　為すくて恋ふ昊乗る七夕の

むる河ふの瓦れ川ふは　雄長老

七夕ふ恋ふ乗し衣ふ乗れと

かゝまる移ふあゝくめ乗れよ由縁女

詩七夕五字對句　同上

巻慢天河入

故郷臨桂水

開窓月露微

今夜耿星河

詩七夕七字對句　詩礎

月渡天河光轉湿　懐良霄

鵲驚秋樹葉頻飛　銀漢回

当簷半落天河水　織女星

遶徑全低月樹枝　笑牽牛

詩七夕詞　王建

銀燭秋光冷畫屏　撲流螢

ブーキ王階夜色冷　如水目着

牽牛織女星　ケレキガスミウレテ

水ノコトク見エルトキ宮女ガヨコニ子

テコヨヒノセタノアウセラウヤミレウニテ居ル

詩　仝　明　馮琦

天空露落夜如何漫道雙星已渡河空ガハレヤカニツユモオリテヨハナンドキデアラウト思フニ大カタ今コロハニツノホレガスデニアヽノ河ヲワタリ玉ハント人ガイフ

見說人間方恤緯可知天上不停梭ケンザイ人ケンカタムケノ糸ヲ星ニサヽゲル乞ト天上ニハオリヒメガ梭ヲヤスメズニハタラオラサセ玉フト思ハレル

詩

仝　唐　祖咏

閨女求天女更闌意未闌向月穿金易臨風整線難ハリノミヽズヲ月カゲニトラスイハナリヤスク風フキニテ糸ヲレラベルイハ吹チフサレテナンギナリ穿針整線トモニ七夕祭リノ故事ヽ不知誰得巧今且試尋看コヨイ乞巧奠ノヽツリヲレテタレカヌイハリノ手キハガアダツタダノヽツコヽロミニトフテミタイモノジヤ

○七夕手向之詩朗詠之分

憶得少年長乞巧竹竿頭上願絲多ヨクヽ思フテミレバワカイ女ドモガヽイ年ヽホレニ子ガヒラカケテテキニナラフトオモフホニサホノサキニカケタ子ガヒノイトガトカクオホイフジヤ

○二星適逢未敘別緒依依之恨五夜將明頻驚涼風颯之聲ニツノホシガタヽサカニアフテヲシヲモ云ツクサヌニ夜ガハヤウアケカヽルカレテシキリニスヽガゼガフイテクルコヱニオドロキタヽハン

○露應別淚珠空落雲是殘粧髻未成七タヨノアカツキノツユハホシノ別ノナミダデアラウガ玉ガムモレシク落ルヤウニミエルヨアケノ雲ハオリ姫ノヨミタレガミノミダケタラヽダツ名ハヌキウチケヅヤ

七日

妙藥妙術

房事を戒む 今日と十五日と此両日房事を戒めはしむべし

白髪を除く法 今日百合の根を煮熟し搗て新しき瓦器に盛り屋の内又は陰乾にして百日置て白髪の人なべて地の白髪を悉くなさして是を塗まい黒髪を生じて白髪をなくす

身面の疣目を去る法 今日大豆にて疣目の上と三度ぬぐい其大豆その人の家の南向の屋の東より第二番目の溜とゝれ中へ種をくべその〳〵一所に疣も去るべし

記憶の術 今日蜘蛛一ツとりて頂乃中に入れ〳〵ゝのなかへつよく能いのをも忘る事なし

○近年彫刻に成る物覚早傳と云る書あり甚よき本なり

七夕之文

晩来雙星之佳會世間巧奠書瓜之奉女児之事不宜乎併待狂駕

尺牘 昏暮并註

晩來 今夕○今宵○此夜○往

辰 双星 牛女○両星 佳會

佳期○良夜○嘉遇○年會 世

間 万国○世上○古今 巧奠

穿針○絲縷○願絲○琴瑟

青瓜 菜奠○緑菓 女児 婦

女○少女○妾婦○兒女子 宜

平 可賞○愛憐 ナリ 喜シロイ 円

併待 云 云 オイテ ナ

(中) 請来弊庐 (上) 仰俟顧歩 サツタクヘオシイデ キツクオモチマフス

(上) 来遊刮日期 ライユウサイチヒラキス オイデヲ二チカタル

七日毬

△七夕毬○飛鳥井家○難波家鞠の會例

式ゐ今日の鞠い七夕祭の為ふ奥行ところへ 年中風俗考ニ見ゑ

七日 京都 北野御手水

北野天満宮梅松院

の主今暁御本社内陣ふ入て御手水を献ト又神室乃内の松風乃硯ゆうへふ掬の葉をそへて備へたてまるゑ

これい七夕の神詠と天神ごゝ昏き玉ゑ為ゑしそ

池坊立花

△東六角堂方丈へ池の坊門人集ヲ二星

へ手向として立花と奥行を立花の当住職専慶法師より初る

○東西本願寺ふ立花あり又数品の州花すて作ゑ物あり是と

△本願寺の竜花といふゑり

○天竜寺虫干○加茂松下虫干○東山一心院虫干○大

德寺虫干

大坂○住吉虫干神宝おゝく出る

○平野大念佛虫干

江戸○九品佛桑花

○本所回向院大施餓鬼あり

大和○石上布留社笈渡の護摩。笈を三ツ僧の肩ふかけて行ひあり

逆峯入

△大峯を称とるハ即金峯山也宗流ふ本山

當山の別あり本山の峯入ハ則今日すて聖護院の宮より逆の峯入又逆峯ゑも云大峯ゑ

熊野ハかけめ多ゑ又本山當山

の御門モ御一代ニ一度踏マヘ
ハ秋山ヨリ毎年ノ登山ハ皆御代
参ヨリ醍醐ノ聖宝僧正ヨリ始
ルヨリ委クハ三月順ノ峯入ノ処詳

八日　京都　文殊會　仁明天皇ノ御宇ヨリ始メテ東寺
西寺ニテ行ル　公事根源ニ出
（俳）文殊ヤ惹ヒヤ惹ヒヤ見ル目　貴
江戸　○回向院佛餉施入ノ旦主現
當両益乃法事執行

九日　京都　六道參　△槙貫　△槙貫　△迎鐘　△迎鐘○建仁寺
の南ニアル六道の珍皇寺ト云
寺ヘ參ル云ヨリ　今日明日諸
人此所ニマヰリテ聖霊ヲむかヘ
ト云テ此寺の鐘ヲ撞ク是ヲ
迎鐘ト云ヒ又槙の枝ヲ撞ク俗ニ聖霊
迎ヒヨリ持佛堂ニ置ク　槙貫
槙の葉ニノリテ来ルモノヲトイ
ヘリ　珍皇寺　本尊ハ茅師佛ヘ

小野篁の像ト小堂ヲ安置ヲ
篁此處ヨリ冥土ヘ通ヒシ道
ヨリシテ六道ヨリ冥土ヘ
（俳）ヒヤヒヤトシテ冥ヲ　山家鳥　春丸

十日　諸方　千日參　△清水千日參　△観世音菩薩ヘ
今日參詣ヲスレハ千日ヲ
或ハ四万六千日ヲ
方ヘ參詣ヲスル京清水江戸浅
草大坂天王寺ソノ外諸方観
世音ヘ今參詣ヲスレハ河州
野崎観音和州壱良二月堂

十三日　今日杓杞の煎湯ニ浴スレハ
無病不老ヘシ　雲英七夕集ニ出ル

十三日　魂迎　△迎火○今夕方ニ亡人
の聖霊ヲむかヘ
麻拇ヲ焚テ火ヲ焼ク是ヲ迎
火ト云ヘ佛家ニ説多シ
○世間ニ松ヲ門火ニ焚ヘ　櫛の枝
ヲ清水ヲ汲ク事ハ

火の陽光と以て天の陽の魂と降り水の陰精を地の陰氣魄を呼びのぞして亡者の魂魄とむかへるべし盂蘭盆漢土の鬼神をまつる式をまるべしるるりのみらんう

○唐土ハも亡人の霊をむかへるとて官服を着し門ハ出て空をのぞき神を導き祭りて帰ることれ又神を送ると出る事ありこれらハ孝子の誠を尽さふ似たれども見ものなくむまん迷ー士君子ハろ人佛者ハまどひてかやうのもざ式をなす事なるもとと五雑俎ハ見えり

(非)於ハ出家者の祭りやあ迷其角

(狂)足て浄むまりてそとるれ者のむしろよあそなるりのみハ常楽菴

十三日　京○東西本願寺　灯籠拝見十五日まで　都

十五日　中元　正月を上元とし十月を下元とし今日を佳節とすること少しくいとれるきよあざれども公式ハ用ひられぞくりくハ日本歳時記ハ見えたり

盂蘭盆　△盆會△盆供△盆施餓鬼ハ盂蘭盆會の遺風なれども常にも寺ハて行ふ事なれども此月の内ハ諸寺ハて專ら行なるべし○勧善録ハ盂蘭盆法事のこと式禅家ハ焔口施食といふ○釋迦の弟子目蓮尊者の母地獄ハ墮餓鬼道の中にありて食ものを得ずよりて此日百味の五菓を供へ十方の諸佛ハ供養せしめ給ふ母則ち食を

得ることゝ経説の意をうこの説
ようして盂蘭盆會となす事
始まることいふ盂蘭盆は梵語
ふして中華の語なり翻訳をしば
倒懸救鬼といふ事へ倒懸はさ
うさまふかくおもし訓地獄の苦を
をいふそれを救ふまつる祭りの
そなへとなすを救鬼といふ
又救鬼といふ救器とかさて救ふ
器なりとして公事根源に出

○唐土にても今日盂蘭盆會を
諸寺院にて営むへ事文類聚に出

○本朝にて齊明天皇三年ふ
盂蘭盆會と設くと云り日本紀に出

其外委しくは眞俗佛事篇
といへる書ふ出しうるべし

○儒家の説まい今日中元な
ゝ以て先祖を祭り秋の盛
事を告奉るへとあり此こと
委しくは歳時記ふ論を詳畧

霊祭

△聖霊祭△聖霊棚△霊
棚。十四日より人家ゑ
新ふ棚をまふけ先祖の霊を祭
るく。報恩經ゑ云く巳人年ふ
六度来る中ふも今日ハ盂蘭
盆ふあうしばりつゝ祭うう
十四日卯の刻ふさうう十六
日午の刻ゑかへるよしへ
△枝大豆△枝大角豆。芋の葉
△青瓜。蕎麥△青そば。早
米△青かさ。茄子△あさがゝの
箸△蓮の葉△かけ索麺△あり
の実。桃。蒐。右の類祭ふ供ずへ
△此印の多い季ゑ△なるうう△
まうしるるもまうの心を
よゝ合ものい季ふうるべし

(ろ) 年中行事哥合　前大納言

年ふゝやゝのさきもとふん
たま祭りて人如月なるはゑ

(は) 冷おもゆ水奥しる霊祭り嵐雪

昊祭々人も燒切のくゝり糸　芭蕉
棚経や声の高さに来る坊主　其角

(狂)くゝり入れて軒迄ゆかせ　陀人
をしかけあれば発こ　おまつり

△棚経　今日其家の旦那寺の僧来りて昊まつり礼前ふて経とよむ是と棚経といふ

(能)棚経やこれ暁ふ阿闍の水　其角

△鼠尾草　(異名)長くしてふ便あれい名づく　全躰熱と治し渇と止るく本草にも見えさ

△水掛艸。穂を渇と止るゆへ饑鬼ふ水と手向ふ用ゆるとぞ○七夕の外ふも水かけ草といふるあり稲のこえくもをれども今日のごとく艸

(狂)藏王　それもさくゝふやおりんを毒のまふく
水かけ草のはものまふく

△墓参　京都へ七月朔日頃より十日頃までふ墓まゐりをする人○大坂ふハ今夜亥の刻頃より明朝へかけて千日とびと小橋等其外七処の墓處無縁の者参詣をするり是と七墓廻りと云○唐土でも今日先祖の墓を掃除して供養をする人

玉篇　(能)おくてをやゑ玉篇　康吉

生身玉　△荷飯。糯米を荷葉ふ包こ吉祥蘭と

△物て上を括て贈答て生身魂と祝ふしいふ

○今日人を祭る昊祭といふ生る父母を饗應する生身魂といふ此月公家武家ともふ世ふ在ます尊親を饗應すること

事紀事ふ出ず

(能)たくはこるゑとあざひく芝の仮　支静

△差鰆　鰆のぜを開きて塩ふつけ二尾と合して一刺と云是と蓮の飯と親族たがいふわく
そ今日の祝儀なり

(俳)ぜをそ鰆の骨多のゆへ生蛋方山刑鯖やうにて刺も夫婦つれ　其角

△鮮夏　△夏昏紙　夏の終なり　○僧徒四月十五日より夏ふこもる内は佛経の類抔昏写を故夏昏紙と云也　尚四月十五日の所又夏鮮と云也　又夏の十九丁メ等見合もべし

△鮮夏草　夏ふこもる僧夏籠終なり　○紙と以て節と束ねて且家へ送ると云　○一説ふ詰祥中のごとくといへり　○歌民要覧曰唐渐右の僧紙と以て節と束て且越ふ送る是と夏鮮中と云今此艸と詳ふ考ふ己ふ五部の法身の座と云名つあて吉祥中と云

京都　○智恩院山門施餓鬼あり　○新善光寺阿弥陀開帳あり　泉涌寺の内ふあり　○岩屋不動　千日参今明日

十五日　△安居頭　昔八幡ふあり今八十二月十五日討あり

江戸　○弘福寺施餓鬼。法華の後相撲あり　○白金瑞聖寺本所羅漢寺施餓鬼　○麻布菩提寺蔵主権現まつり

大坂　○天王寺講堂一夏の結願　○住吉盂蘭盆会角力あり

十五日　近江　△三井寺女詣　常へ女人禁制の山なり

今日一日ハ女の参る事とゆるす三井寺の訳ハ委しく博物筌ふ出ど

近江　○浮御堂法會。志賀郡堅田

七月十五日より同十八日を法會有

十六日　国俗今日親戚を會して遊楽と事正月十六日ふ等し

天氣 今日の雨と洗鉢雨と名付ゝ来年不作の兆と
を○今夕月上るゝ早く晴て
く月上る事遅々しい秋雨多〳〵

十六日

△**水灯會** 宇治黄檗山の僧宇治川に出て修行す

十六日

△**施火** 送火たくさんもえ
△大文字火 △妙法の火
△鳥居火△舟形火○京洛外乃
山々まで文字の形ふなき木とゝん
てやくるゝ其間一丁二丁れも及
ぶゝ鹿ヶ谷大文字此筆画甚よ
市原山のいの字松ヶ崎の妙法
の字西山の鳥井の形西加茂の
釣舟をれ外東西北處々乃
山々まあまゝあり甚見事
なる事ありこれを送り火
又施火とも〳〵ゝ

△**送火** 魂迎せ聖霊と送る
河邊に麻柯を燃る

〳〵京都の俗ゝ今日より大坂ゝ
十五日ゝ其餘處ゝよりて變る
(俳) 送り火や宮ゝ〳〵の大文字 其角
大文字まつて流せ雅波川 三帷

京都△**燄魔祭** 今日と燈籠の縁日寺
京千本燈籠堂泰詣

△**松崎題目踊** 松ヶ崎妙泉寺
堂の前ゝ男
女うちまゝり題目ゝ唱
まて声れ〳〵くるゝ
○山崎宝寺開帳○北山村石不動
泰○紀森念佛踊 限今西日
江○燈魔泰○増上寺山門開
戸○雜司ヶ谷とも〳〵

大坂△**經木流** 天王寺亀井ふあり
今日經木の表ゝ
亡人の戒名法名と記し亀井
の水を手向ゝ〳〵ふ

十六日

△**新綿** 内裏ゝ貢の綿を
〳〵則真綿ゝ

(三)　夫木　爲家

駿河なる富士のくゝつ子れ彩ゐたゝ〻の老れるふ似くゝん

○右證哥と出とゞくく真綿く

後ふ永禄の頃より初て木綿ハ船来ー故證哥と時代大ふ相違せる事と見つゝ俳諧の季寄集ま九月と出ー三秋ふ渡るといふものハ藻塩草と見ま誤まり七月十六日ま定まる事ま事ハ〻ー〻ー〻して九月ふまる事ハまづきまや尚九月の條ま見ふ

十六日△　衝突入　伊勢の山田ふあるとまりまべて人の家ふ秘藏まる物と見まれや思ふまれハ今日其家ふつと入て見る事まり往昔ハ諸国ふもありしかど今ハ絶まり○今猶伊勢山田ふ日の九九名号と

て圓光大師の御筆と出ー

拜寺寺あり此日近辺の寺院も出ゞ〻〻ひまをこれ突入

の餘風ありまぞ

(俳)ハまま又や大ろろと吟ろ　波由

十六日△　鷹鳥塒出　四月ふ初まる時鳥屋ふこめ置て七月中旬新毛と生まる時塒と出まと今日塒と出まこと　蓑塩草ま出

○負德曰鷹羽出揃ひる時夜分盆の聖灵會の著ととりて塒より出と故ふ〻ー　鷹鳥ま也ふ

(哥)　ゆるハくやりろ〻かつ色あ〻久〻繁〻せゝるやとゝ　定家

ゆる屋出と秋ふまる日ま夜の日夜の所ねつのゝ代ゝ　定家

日夜の所ねつのゝ代ゝ　定家

(俳)　ゆゆ夫の片ゑやゝ　学文志三惟

十六日　妙藥　去三戸虫法　庚申の日ごゝ手足の爪を切ま

ゝり繁り置て今日灰ゝ燒て水ゝ
てのむべし扨そのち一度庚申を
守きゝ三尸虫と伏し押へて天上
へ到らしめず七度庚申を守れ
ハたゝふ三尸虫をくろすよ
徐春甫が古今醫録ゝ北帝
玄経と引てくへ
しく〳〵説きくり

十六日　赤壁月

今タノ月ヲ云○宋ノ元豊四年蘇子瞻東坡居士ト号ス遊ビシテ賦ヲ作リタル故事ヨリ起レリ

今日赤壁ト云フ所ニ舟
遊ビシテ賦ヲ作リタル故事ヨリ起レリ

(賦)古文真宝　前赤壁賦　東坡

壬戌之歳七月既望蘇子与客
泛舟遊赤壁之下清風徐来水
波不興舉酒屬客誦明月之詩
歌窈窕之章少焉月出於東山
之上徘徊於斗牛之間下畧

○既望ハ十六日ノ夜ヘ蘇子瞻此日客人ト共ニ舟ヲ赤壁ノフモトニ浮ベテアソブニ清キ風ガソヨくトフキテ水ノ波モタヽヌホドナレバ盃ヲトリテ客人ニサレ月イデ、明ラカナリ窈窕トレテタヲヤカナリトイフ詩ヲウタフト云コヽロナリ

十七日　京都

○壬生寺六齋念佛あり
○上京小川本法寺虫拂

十八日　京都御靈御出

祭りハ八月十八日ゑ卅日ゑ閻魔菩薩ゑ御鎮座ゑり委しくハ八月ゑ出を

十八日　宗祇忌

俗姓ハ飯尾宗祇左衛門と称セし人ゑ紀州の武家ゝ生ゝが世を遁まして薙髪し京師ゑ住し生涯を雲水ゑまゝ行脚せし人ゑそ和歌ゑ達人なり

十八日 △文學上人忌 行狀委しく博物筌ふいでず

廿四日 諸方△地藏祭 今日地藏を祭る事ハ是又扶陽の術ふして秋の金氣を扶あん為地藏を祭まうとぞ殊ふ石像を祭る事ハ神道ふ石をまろふ比諭して始めて訳ある事なり

京○六地藏參詣。加茂。山科。都御菩薩の池。伏見。鳥羽。桂村。已上六所○愛宕山千日詣○町々地藏祭をなす作り物をなす

○大坂うつぶ堀詣地藏祭分て賑ひ

○河内八尾地藏會式なり辺郷より群集す廿三日廿四日大市あり八尾のかゝとさ市又鶉市ともいふ

△あたご火 摂州池田伊丹ふあり彼地の愛宕山ふいろくれ燈籠提灯と影ゝ燈して祭さん其火光近郷ふ映す

△鷹山別 鷹の親子巣と立さふ飼ふい諏訪明神と始ん廿七日御射山祭ふハ鷹も詣ずる故廿五日ふ巣を辞をやうこの事かゝれよ論あるいくい補遺ふ年明を

(俳)巣をこゞ別とも鷹の眼ふ芭蕉

廿七日 信濃御射山祭 ◇穂家作りの御神事なり

信濃國諏訪明神此日薄すて神殿をはなる其外人家も祭りの程いまゝれとふくなりをきとみをとしいふむゝへ勅使あり御狩ありて鷹とつゝ

(句)かゝてふく秋風のをの山なかま牛やはゝ鷹なるゝん 定家

(夫木)尾花さく松やの四つの一むらふ去り里ある秋のゝさ山 盛久

(俳)かゝ夜の神も鷹とふく日孔雀六

月令

此部ハ七月一ケ月の事を集えしるす

△**攝待**　△門茶の往来の人ハ茶を施す紙ハ仏祖統紀碧巖録等ハ出て唐にも古く有来るこゝにて本朝の俗称ハ攝待の事ハ常にもあれども此月初より廿四日頃まで専ハ有り

(俳)　扇の景にも愛ぜんとゝ云ふ道定

△**燈籠**　△高燈籠　△燈籠　△きりこ燈籠　△船灯籠　△花燈籠○影灯籠　西ハ△折り灯籠　△廻り灯籠　△軒の灯籠の民俗佛事とする月ハ佛ハ供ずる為設るゝ多く十二三日頃より此月中より寺禁中の燈籠ハ十四日の処ハ有ると又大坂ハ墓處ハ十二日より十五日まで燈籠をとゝのふ

(句)　七月十五夜月はかゝる間　西行

いそ我今我の月ハ身をそへて
あそその山路の人をてらさん

(俳)　おろへ行つゝく悲る灯籠　移竹

紙製と云ふそれの灯籠の長字ハ　屋里

△**踊**　踊躍ハ遊戯の長ゝ有りのこれより朝神代より有りこれ

(俳)　朝夕ハ踊るゝ踊る　豊後

(狂)　えやしめる踊の庭の灯籠を
とりてゝ見ハ物籠をとり　近吉

△**花火**　炮術家の餘興ハ
物ゝ家々其藝ゝ

(俳)　工ゝ多ゝ人出て種々の形をとる

(俳)　仕ゝ手ゝ花ゝ接ゝ多ゝ咲ゝ花ゝ火ゝ　半夫

(狂)　ハ火入さてハ小町ゝ弱ゝ
浅生ゝ花火せんかゝ　負山

△**秋扇**　△扇置　△扇ゝ置　△團置　△團ゝ置

(連)　凡てゝ扇ハ秋の扇ゝ宗祇

(俳)　ゝ扇ゝて無ゝ一角

(和)夫木　定家

芙蓉を吹きそよがす秋の風を美人の扇と思ふらむ

(詩)秋扇詞　王昌齢

芙蓉不及美人粧　水殿風来珠翠香
美人ノヨソホヒニハナモ及バヌホドナリ
水ノ上ヘカケツクリニレタ御殿ニ井テ玉ノカンザシニテガハナノ香ニ匂フヤウナリ
却恨含情掩秋扇　空懸明月待君王
扇ヲ負ヲオホフハ何ノ
センモナクソラニアル月ノヤウナ扇ヲカザレテ君ノ之ユキヲ一ツバカリジヤ

京都六齋念佛　京師下ハ茂の東千菜寺ハ豊大

△閻の御時六齋念佛免許の状給もしう。鉦笛と合奏して六齋念佛して洛中を歩行す。和州ハも處々ハあり

相撲節會　△ことし使△童を△相撲是ハ三社ともハ云

△辻をきめ日土(漢名)角觝をまのとの互ハ力を争ふと云

古訓ハを中ふとい俗ハ孫ちわふとい心の言葉なり角力

又ハ相撲をゝ文字ハかくゝ

○禁中ことし二月三月の比諸国ハ使をまのとをされて力者と名さる者と部領使といふ叔相撲の節會ハ天子も御覧ある事なり

先十六七日の間ハ召仰といふこと

あり廿六日ハ内取して憤鼻の上ハ將衣袴を着て勝負し廿九日よりそでとをぐろる者ばかりふとすゝ人今諸社の祭ハ相撲と取るとい禁中の節會と八幡春日をゝ人給りこうよう始まる

(和)年中行事哥合　女房

かくさまれてことし仕のいそをきを久人のめよとてのあとかりそめ

(能)明妹家人のもとに有衣香両

時令

此部ハ七月一ヶ月乃時候カラ云フ

初秋　朔日より三四日をいふ　和歌にいひひろくよみて七月なからむまでのけしきをもよめり

(歌)　千載　　寂蓮

秋ハ来ぬ身も世ふるぬるとやおとろかれぬる風のおとにて

仝　　初秋表　　為尹

小萩ハかすもあへと吹に生ふ　まくまくに一条の秋ぬるの野

金槐　海辺初秋　　鎌倉右大臣

雁たちて物ぬ空ふ朱に染し　吹上の浜乃うらの汐むす

(詞)　まくまく渡る秋の色。秋と並ぶ。絶ず。初て涼し。かやの原。淋ぶ。蟋の松風。今ぬる涼き。まくふ。むくむ。風ハ多ふ。むし蛾の初風。松のあし。初秋風。萩ハ咲初る。

蛾と知る。萩ハ青くて初る。蛾と共ふ。松ハ風の音ふ。淋しき。梧ハ落ち初る。相の一紫。露ハ並初る。蛾と共ふ。扇ハ扇と雁と並ぶ。華ハ八重むくむくもけの花ふ。宿ハ秋来る。薄ハ穂ふいでそむる。浅茅原ハ雁ハ鳴初る。柳ハ初穂ふ一系ちくとくそう迄秋の処ふ故事あり。山あしハ風ふ雁をべしを外やまの京物とくもくもうそう

(俳)　初秋ハ名うこ絶すくれ　嵐雪

(詩)　初秋五字對句　　同上

軽風換炎秋　桂月秋先冷

明月流素光　蘋風向晩清

(詩)　初秋七字對句　　詩礎

地接邊関秋　色早動秋聲

秋ノ色ハ早ク動ク秋ノ聲ハ

樹翻烏鵲・月明孤・片月孤

タチカヘリテ月ノヒカリガサビシイ　シキガサビシクミエル

詩　初秋詞　五言律　元鎮

且暮・已凄涼・離人遠・思忙　アサタヘヨホド

ヒヤ、カニナリタルユヘ旅人ノ故郷ヲ思ヒ

オモフコロガサハレウナルナリ

夏衣臨・曉薄・秋影入・簷長　マダナツ衣裳ノマヽ、ナレバ夜アケヤヘニハ

ハタウスニ覚ヘ上ニ夜ガアケレハ

秋ノケシキガキフカク入テクル

前事風隨・扇・歸心燕在・梁　スキサリシ夏ヽハ風ノ扇ニシタガイテウツアトモナ

ニシタガイテ帰ル心ハウツバリニ

ク古サトヘカヘリタイ心ハウツバリニ

アルツハメヲミテモウラヤヽシイ

慰勤寄牛・女河漢・正相望　互ニ逢セヲ待テ井ルヤウス

三デガワガミニツクサレテオモヒヤラルヘ

残暑　△のるあつさ。七月のちゞ

△　ゑんより残暑といへ

(詩)　大末　秋風の吹もつらぬ高原

夜のゆきのれるるなり　有家

(連)　暑さ見ぬ秋の空の見る紅巴

(俳)　久月ふ流ゝ汗や退るゆ　嘯慰

同　ひの付あふ物る暑さうる　風斯

(詩)　残暑七字對句　詩礎

暑氣尚能凌・白羽・秋光早・アツサハヤハリ鳥ノ羽ウチハモヒケズ　アキノケシキハヤレ

風聲不肯入・清商・夜色闌　ヨルノケシキガタタ

ヨハノケシキガタタイラヌ

餞暑　△送去餞ト云暑の去さハ送る意ハ故餞暑と云　説文出

稲妻　△光をあつて雷をゝ

とゝ

ゝふも同じゝゝあれどもいなびかり

ととゝへてハ雑ゝうゝれる空ふ

光るハ秋のゝゝ光にあつてこれい

風雨ゝよゝゝゝゝゝゝ季夏甚

き陽気秋収斂の時ゝゝゝて

地中ふ伏ぜんとするゝゝ陰陽

相ゝ合て光気とあゝ

季秋巳後ハ夏の陽気收り伏

ゝるにようゝいゝゝゝゝ

ひるハ風雨ゝ〜〜〇晴て

〜〜〇秋の始曇り

て光(ひか)るハはでるといふ雨となる夕(ゆふ)ぐれ

立気(きけ)まそ長雨はれるらん

(哥) 夫木 山田もるすごく庵のまくらねに いなつまてらす秋の夕ぐれ 寂蓮

「かつらきや こけに光るいなつまを 山ふしならで たれかしるらん 兼昌

(詞) あへてふ。やどる。影光る。うつる。そらなれ。霄ニハ 宿れ稲妻 雲ニハ 雲のそつぎ。雲ある露ニハ 宿りもそへぬ。うつる。やどりあるき。淡芽 夕立ニハ 涼し ○無常 世のもろきはかなき たとへ也 外山。小桃。あまくだる。かつられ。夜すがら。

(連) いなつまハ光にむしを光らる 紹巴

「いなつまも見えかくる也とうたせハ 玄仍

(俳) 稲妻を手にとる闇の紙燭かな 芭蕉

「あれ空ハ稲妻をも綿たりけり 仝

(狂) 稲つまや経表の松沖の山 麓勤

稲つまのこゝえぬ光も線香の [illegible]の粉ヶ入ルて消ゆるの 貞雨

(詩) 稲妻五字對句 同上

爛迷星少色（ランメイ ホシ イロスクナシ） キラくトシテ星モ色ヲ失ヒ	照天飛火鏡（テラシテ天ヲ トバス 火鏡） ヒカリハ火ノカゞミノトンデ
晃奪月無光（コウダツ ツキ ヒカリナシ） ヒカくトシテ月ノ光ヲウバフ	横漢掣金蛇（ヨコタハツテ カン キンジャ） 天ノ川ニヨコタハツテ金ノジヤヲヒクヤウナ

△秋初風（あきのはつかぜ）

(哥) ○立秋の詞かきたる 亀山院七百首

「今朝のまに秋覚涼しき衣手に ひとへにたちぬ秋の初風

秋涼（あきすゞし） △新涼 △初て涼し ○秋になりて涼しきをいふ

○礼記大全馬氏曰涼風至ぬれハ天地の仁気散じて殺伐の時候になるをしるべし

(哥) 月清 野月露涼 雅経

「袖の上に更行月のあらはれてほど吹すさむ夜風ぞしる

(詞) 暁かけて。秋とおぼゆる。夕くれ涼し。露さえむすぶ。物思。の風。風の音。吹すさむ。身に

入。風ふる。雨もあり初りのあま
のたすと志れしかれ
連 涼とそ名れしかあさ秋の風 宗祇
俳 盆おの涼きハ小さの額引 宗長
詩 秋涼七字對句

詩礎

灌残暑氣朝来雨 三伏冬
サンフクノナガキレハ

助我秋声夜半風 一涼新
タスクワガ秋ノコヱヲ作シ侍ノ奥ヲ

八 初嵐

△初嵐 △中秋の中比まで乃
嵐とハ○嵐と計ハ連俳ハ
雑ゑり △初嵐として秋ハ定む
ることハ春夏ハ陽気上昇する
時節故吹風もあらやうなり
秋より陰ハ次第に冷る故吹風
も秋冬ハ強し故ハ初の字
を添て秋の季とす。青嵐ハ夏之
(句) 夫木

慈圓

秋風ハ萩の上葉もあれくて
あらしふるなるそるあらき
詞 嵐ハふる。ふきあ。所ハ。い
ふ吹。あらき。吹まく。ふる
びく。つらさ。ふまう。ゆまし。
連 はやしなるなと吹ふき秋嵐 宋碩
あらあらしなる葉ふむくやそろ嵐 左秋
俳 ふく風ふるす嵐の秋さ小 保久

冷々
涼ーとつよりハ重く
寒ーとハいはいはろー

哥 雪玉集

實隆

かゝ衣野分の名さの朝さむる
秋冷ーき花とそ
俳 ときまれ時の鼓の左ゑ小 芭蕉

秋色
艸木山川ともハ色を
あらたむるとゝ

(句) 衣ふうれてもそもそも秋の色と
きりてそきろる鶏鳥の花 顕憲

二百十日 立春より二百十日め
をゝ今日の風

を恐るゝハ二百十日ハ早稲の花さゝ二百廿日ハ中稲二百卅日ハ晩稲の花盛りゝ是より後ハ花ちり実ふるゆへ風吹ても稲ハさゝらず稲の花ハ中に水のゝ如白きものあり是米なるゝ風ふけハ此水を吹ちらしてふり米出来さるゝ雨ふしハ此水を花にそゝぐゆへ花ハ開ハ風ふてもさほど害をさす雨なしの大風を恐るゝハ東北より吹を大坂にて上げと云此風吹ゝの事ハひえて赤けれり西より大風にて吹ゝ事より是をきゝふ○東南の風といなさ或いいせこちと云あゝてゝるれども是も吹さつのれバ大雨ふるゝとゝ東より吹風ハ雨ハなりゝ西より大ぜまて吹ゝ事雨なれバふ

ゝの事なゝ大形ハ雨なり
て出さゝるゝ○西北より吹と
あゝせとゝふて日和より西南を
沖氣とゝふ曇りてゝくれ
ども日和つゞをりのゝ赤なるとも
りゝふり出せハ此日和ハ長きも
のゝて西より晴てゝるかゝ特ハ
ハ沖より雲をつきのゝて雨
ふるゝゝ此風吹ゝけバ日和も
曇りも雨もゝかゝ長くつゞく
りのゝ○申酉の方より吹とま
せとゝふ日和ハいとゝ○東ゝ
ゝ吹ゝゝ西より吹風にゝいゝ
とゝふ風あり此風ハ地へふた
つゝて其所より風次第小ゝ
きゝゝるゝゝく大風なり稲と
損ずる事甚ゝ雲ありて北
風ハ雨をゝたゝゝどる事ふも秋
北とゝゝ秋ハ金なり北ハ
水ゝ金生水の理なゝ雨を生ず

うえ志うれとも夜晴
て北風い日和よ〜

草木

七月の草木を集むる内に入る
ごとくなれども八月ふも用ひ又秋
三月にもこゝろるものゝ

楓 〈青楓〉本名を雞冠木 くふ
和名をかへでといふ 幸い蛙の
手に似るゆゑ葉なるゆへ名づ
けるなり 種類甚多〜

異名 丹楓。紅楓。霜楓。錦。
○和國乃楓し唐土の楓し
大ふかたち異なり葉ふ三角あ
りて両様あり 秋出る

唐楓

和国京都高雄楓圖

○かへで。ひさだ。そそ。ま
ゆみ。これ類紅葉するゆえ
ば九月なり 人〜く九月草
木のそゝ後ふしるす

万葉 我宿のもみぢ楓る毎
いもと、ちて長き日いなし

俳 紙田川みたれとなり春楓紅簾
まきとふ〜ぬゆゑ蔭や楓のゑ 芳室
風ふちぬさゝあちぬ春楓 芝
春楓春恒さえ紅葉の形 五風

狂 まこと春い紙ふあ〜ぬ竜田山
紙えて殺入古々へ去ぬ 負室

楸 キサゝケの畧へ又雷電桐
ともいふ又かさげ
○さゝげのごゝ長一尺許の莢
枝の間ふ垂る皮鱗のごゝ

異名 木王。實名 楸。梓。椅

榎。そぐ〜少〜ちかひて種
類多〜。こひさだ。そうひさぎ
赤芽柏。あづさ。河原ひさだ
等諸家の説多〜人〜くい
神遺よ出をへ〜

万 夫木 うい玉の夜の夜ひ楸ゆる
きよれ河ふよふ春ゆる 赤人

俳 取〜て人なとゆう楸ゆる馬尉

柘　栢の屬なり実い淡くして食ふべし暮秋ふ紅葉をれども色うすし奇ふも色うもなくとよろしく

(万葉)山しなの石間ふのくそもふ日ゆくやあのふちゆくらん　宇合

(連)ちらぬうち柘榴色なる柘榴紅巴ふちり　提河

(俳)柘榴八松の男のそりふちり

檀　文字たんか　唐土にて沈香或い白檀木い檀の類にて日本ふあることなし今にてまゆみといふものいあり木の種類にて其羽のごとく物あるなり枝ふ矢の羽のごとく物あるなり

ことふ物産家衛門に売なり陸奥にて紙ふ作る物此木ふ

(万)花のむを岩垣まあこ色ふひしこれとあしふあらせもなる顕輔

櫨　(本名)黄櫨。天子の御袍ふ染る故ふ黄櫨

澤くふ三月ふ白花と開き秋ふ紅葉とる漆の類なり

日及。舜草。花ハ朝ふ咲

木槿

槿花一日栄諸者流槿と

て夕ふ隕る故ふ槿花一日栄くふ今能諸者流槿とあさがほと混ぜむりもむくげとあさがほとそ

しとなり次乃万葉集の哥にて知るべし

(万葉)約ふいあさ者ふて味くふと夕かあれもてさかまこと名

○是むくげの歌なり古名朝顔なる事なるべし

(俳)出日ハ菊ふ生なる木槿ふ芳室

ふとみてれそるひむくけ杉風

朝貝　蕣又牽牛花とも昏く近世数種の珍花を出ぜり　(一名)假君子。朝花ひらき辰の時ふ花ぶむ蔓艸なり

(狂)浦風ふ沿や芳しん絵歌
ゑひ的石の的乗乃ゑる　顕季
(詞)花の的乗。家の的乗。ふ川の的乗。一付。夕
の姫線。伐るもれ。
かゑ〱ゑ。去の〱の先ゑ。ア
ゑちふかる。さかり和ゑ。
家ゑひもゑ〱。
(連)むりふ見ゑき的乗の流れ　宗砌
(能)蘇ふつゑ乗れてもゑひ水　千代
蘇のせりく咲て海遊ゑる　常牧
(狂)的乗の家ふなくし人間も
家和ゑ命のゑ寺的おさ　僧一道

秋海棠

異名　爛腸　斷腸草。

花。りく海棠ゑいへ名ハ海外ゑう
来る故名づく

玄及

會及。五味子。莖を
美男ぐゑいへ堂上方
ゑて今も水ふ浸〱糸まゑて
髪と結ひ和ゑ地下及ひ民間
ゑも元文寛保の頃までハ此製
残ゑり鬢附油さんふゑて
より玄及と用る人ゑ一只雲乃
上のゑゑり花ハ三月実ハ七月ゑ

桔梗

蛾のひゑ〱ハいまゑへゑ
(桔梗の花咲ゑ和ゑ云ゑる千代
桔梗の色若ゑの時ハ寒竹
(狂)絵くてゑれも桔梗の深牡や
色あさのてゑつゑ見ゑ家門

澤桔梗

葉ハ山丹ゑ似て少〱
短く又桔梗のゑと
く大ふして花碧ゑり根白〱沢
中ふ生〱長く生ふるゑ又浮
蕎花も沢桔梗ゑいへり
(能)沢桔梗花の色ゑ沢ゑ　茶雷

蘭

京師の俗ゑンランゑ称ゑ
野ふあり物ゑりゑ
の葉ゑ似て切叉ゑ薄紫乃
花ゑひ〱く香ハ葉ふあり蘭ふ

三種の異あり漢土の古蘭と
いふものハ今の茶蘭なり和の
藤袴と称する物ハ本朝の昔
より蘭くいふ物へ和漢近世
蘭と称する物ハ建蘭なり
次ふしなり

敏行

(兮)古今
行人のそでふるよりあやしくも
花の匂ひのうつるなりけり

匡房

夫木
かきくもる雲の彩ぶの
五代の秋まで白へとそ
(俳)悼九の坪へと埒す　蒙　支浪
羽織れの美ぶ　声可
(狂)きさらぎ　きさらぎ　負徳
白ひも　ちさ　ぶ

建蘭

数十品あり其佳なる
ものハ　価大ふ貴し　兼長
く麥門冬ふ似て一二尺花ハ莖を
抽で数花開く　蜂ふ似る

(俳)業ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ
る者と　ぶ　茶　ぶ　ぶ
(狂)　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ
所のそ　ぶ　ぶ　ぶ　喜文

女郎花

ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ
ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ

うりこの根醤のムさうろ香
あり花ハ人のよく知る処なり哥
によむハ女ふたへて戀哥
ふ尤多し　○俗敗醤と混ぜり
偶ふ似ると以て誤まり敗
醤ハ弄花家　狩衣と云花と

僧正遍照

(兮)古今
名ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ
ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ
○此ぶ　ぶ　遍照ハ奈良ハ
ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ
ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ

千載　女郎花題　雅兼
ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ

吹来るまもるがうきゑ

連　そよ吹そ足てしるる人もなし　紹巴

俳　ひるくらく行あるくやあるく　芭蕉

仰いもとりて足　鳥や女郎花后里

茶の花

△とうちべー

べーといろてこと覺東邑　左万葉

ふ男べーるどいつ中うる哥あし

どもこれとさてよるる哥こもき

うんを又茶の字義もさどく

ず梅をるふ女郎花ふ白き花も

あきぐそれとをとこべーといる

うや爰ふハ先俗説ニ曰さぐび

茶の花ニ曰かくう

俳　おるるやおるとるや男べー　百外

男べーとそもるる　其十

狂　男へーとるる花ニハ似もせのて

いるる人の京あくうや　貞史

仙翁花

△せんのうげ

一名　紅梅草ニ出仙翁

花の形がんぴふ似う

(元)　菓塩草　如の山紅梅ちよの花れへ

ちるのんとまるせつるこう那

俳　仏義花ニ云れのやくまへ入安

観音艸

△くわんおんそう

形藥須知ニ記

祥蘭と昏こう

花いうすむ〜さく莖と出

きんで〜穂をるす

俳　おる〜いたるくそ貌中　珠明

翁草

△おきなぐさ

初春苗と

生〜葉麦

門冬ふ似て甚白く白髪の如

し故ふ号〜花秋へ三才図會　出

(元)　散木集　俊頼

乃の辺の人ふ

かるくれるるきそする

俳　れるの枕ふ敗る義ニ　三惟

男切草

漢名　蠱奇奴艸

元秋ニ出す又茶

師草○青茶○花小黄三

稜の莢とむとび中ふ小るる子

あり　○青菜又菜師草と名づくるハ此草金瘡の薬ふるる故
なり　劉奇奴かくれと煮れども
茶能ハ一ッ〻て花葉異なり

哥　鷹百首　定家

秋の野ふかまさ松のうるまを業
何ハてハ春やさ〻ねるらん

俳　さよ衣ぬれぬ袖ハ陰干にして
妙薬　疝気ハ陰干にしてせんじ
用ゆ　○血ハ切ることなしハ此葉を
陰干にして粉ゝ油ゝて付る
○此巣とあれば汁出るハ一
切の金瘡又ハ腫物ふつけ
てよろしく妙なり

益母草

一名　茺蔚　○莖胡麻ハ似て葉ハ麻ハ
似ようの節々ふ小花て開く実
あり婦人の病ハ功あり故ふ益
母といふ目と明らかふ一精を
益す故ハ名づけたるの名あり

萩

○波木　△糸萩　△白萩　△小萩
異名　胡枝花　○天竺花　花史西
和名　△古枝州　蔵重　鹿鳴州　別名　○初見州　蔵重
庭見州　蔵重　月見州　藻塩　野守州　同上
冬茎かれ出して春葉を生ずるを
木萩といふ　冬巣茎ともおれて春
新しき苗を生ずるを小萩と云
△糸萩ハ花紅なり　△白萩ハ花ろ
花なるべし　奥州宮城野ふ萩多く
生ふる山ゝ其内ハ白花あり又
白紫咲きけるもあり　其外調
の所ハ△印あるハ季ハ用ゆべし

哥　續拾載　我袖ハ萩のうへ露ハ
そよろぐかぜに乱るかなん　俊成

玉葉　乙女ゐのかつ〻
おとをくらるる秋の夕ぐれ　為家

藻塩　せをなきさ岩ゝ花を咲ハ
ゆり山桜ハ花をゆうつるなり

蔵玉　文人撰の〻ゐもの
〻の秋も死ハ咲なり　西行

㊂詞 咲。匂ふ。ちる。うつろふ。風ニハ花ちらる。
露にハほころふ。霧ニハきりの籬の秋萩 古今三八
古里の萩のふりしき。衣ニハ秋萩の花をすり衣。
萩か花ずり。かざしニハ乙女子かかざしの萩。

△萩の錦 萩の葉を新に露見えさるなり。秋の中にもろ／＼の織にて錦にも似たる階

△もとあらの萩 萩の古枝に咲るをいふ 本萩と いふ 又生ひ出る木より
枝さしもて行くしきもへ名つくるその内に大小あるべし小さき花をなづけて小萩といふなるべし

露 萩よりハあきのかぜとよぶなり。萩の うハつゆ。萩をうつり。露もそへある

月 萩のうへハ月をやどる 萩むらなど

七夕 七夕の七草の一 とのなり

簾 萩ハ簾の書といへり 簾ハ古秋とこそ大縁あり 簾の花書。簾の志がらなどよめり

恋 紫ハ也ゆかりとふ紫ハ女のことふそこなれバ 萩のよせて由りのなごりの恋ひしきなどよめり

禁中 萩の戸 女萩屋などよめり 番く秋の二千仕すに出

子 こきぞたゞぞ子宝たせぞる言邊

㊂哥 あらき風ふせきしかけのかれしより こはきかうへそしつ心なき

㊂連 ゆわえぬを露紫の小萩かな 宗祇
花もまさむ かさの萩の露 肖柏

㊂俳 白露もこぼさぬ萩のうねりかな 芭蕉
萩の花咲ともいふ日を鈍なりけり 禹洸

鳳仙花 △つまくれなゐ 金鳳花 又ほねぬき とつふ。花紅白あり
花のかたち飛鳥のごとく又鳳の あたましよく物の骨を解を故ニ 骨ぬきの名あり 三才圖會ニ出

㊂俳 鳳仙花の重れ庭に生く 春若

㊂詩 鳳仙花詞 無名氏
・細見金鳳小花叢 ・費盡同
・花染作紅 ヨク／＼コノ花ヲ見レバ 鳳凰ノヤウナ
ハナガアツマツテ咲テアル花ノ色ハウルハ シイベニヲオシテズツイヤニテコノヤウニテ
ウ染タモノ テアラフ
・更饒深淺 ・雪色 ・白邊 ・袍色 ・紫
・四般紅 ツノハナノ中ニハユキノヤウナ
白イ邊ガアツテ大臣ナドノ着ル
ムラサキノハウノヤウナトコロモアツテ
コイトウスイト四色ニソメワケタ
ジヤウズノ手キハカ見エルゾ

旋覆花 △せんぷくくわ 野径の水溝乃邊に
多し 大きさ一重之
重瓣のものの甚少し せんへの
物と号けて 水慈童と云花

ハ野菊の黄なるぶごとし

異名 滴露金○野油花

野菊

鍬稈 蒿又野粉團と

いふ一名菜に似て莖か

う 救荒本草に出 又春ハよもぎと

いふの秋花さくと野菊とも云

やいと花

葉女蔓ふに似て花々

簡ざくなるやう

かうるさくさく小花いろ

白く内もこ〜紅〜小児こ

これの莖つきのかゝ灸上ゆ

て身にあて灸のまゝとも

にとく似るゆゑ名づく

俳 これも又父母の恩あるやいと花立圃

曼珠沙花

和名 天蓋花○燈

籠花 漢名 石蒜

異名 烏蒜○老鴉蒜○水麻○

蒜頭艸○凄々酸○一枝箭○葉

ハ孤のかゝるかゝ花ハ莖と

ゝくさんて五六朶いろ〜なるなり

ひろ〜糸をむとふがあと〜

俳 ものあるにも結ふ影花人也 其十

常山花

葉ハ梓楸に似て

ひろく甚ゝさ〜

六月花を開く七月ふハ此虫

とろうり常山ゝ苗乃名

蜀漆ハ根の名なり

俳 見てそれハ常山の花もろ〜花李漢

顔桐

○ひさう○葉大きさ五

六寸ゆて皺あり

蓖麻子

和名 ゑまゝ○かゝ玉

○かゝ〜ハ

渋柳

渋柳所々ふあり○渋取

法又渋紙の仕ゆゝハ

〜く日本歳時記ふ出ぜり

俳 法ゝやゝ仏名の栗ゝ上名岩翁

茗荷花

七八月根のかゝりふ

子と生ゝ即花ゝり

蟄蚯金花

異名 王金○葉ハ芭

蕉ふ似ゝり花白

質紅く深色ふとりの人此根うり
花ハふとりのごとふ似て甚大うり

俳　ゆ[illegible]にもわせうりの花ハ鬼灯
うりうりの花ハ白い慌ちくい為言水

△薏苡　仁ハ穀のごとく粥
をして喰ふ又ちと
とけくるさて念珠とする也
いりこの名あり実ふとり
て季しとせう

俳　今年糸り先一蕊と芝[illegible]玉瑞

△蒲萄　異名　蒲桃○草龍珠
○北国ふとく白蔓ふ
て棚を延ふ実と以て季しとす
二種あり一種ハ多びひろくと云

△紫葛　多びろくハ山葡萄と
いふものうり袍の名
び色ハ此りの外以て深くう物
ありとそ但し葡萄ハ実乃
名あり紫葛ハ樹の名へ
一種の別名蘡薁といふ。

ヱビとけ酸くるごとく
実の色ふけきくいとり

俳　賢ハ桃へあのうり
蕙の実ハ爰へ生れし葡萄なる地高

詩　全七字對句

雨来枝上清泉沾　アタキタツテシヤウセイセンホトヒ
アメガフツテクレバエダノウヘニキヨキ
露重稍頭紫玉垂　ツユオモシテヒヤウトウシギヨクタル
ツユガオモケバホノウヘカラムラサキノタマガブラサガル

妙術　蒲萄と棗の根
栽て春ふいくう其棗の木ふ穴と一
あけふとうれ枝をさしこみ二三
年と経て枝ふくう長くうりて
棗の穴一ぱふ蒲ろとたぶうの
根と切とされば棗の木の接木と
なるうりよく生長して実と多く
むとび肉厚く棗れと味美へ是秘術

詩礎

珠顆重　シユクハオモシ
タマガオモクサガルヤウナ
水晶明　スイシヤウアキラカ
ウニキラツク

桃子　異名　仙菓○蟠実○三偷
○洛陽略　種類　碧桃白桃

○早桃 五月の子なり 毛桃 山中の冬桃 十月に成る 霊桃 上に同じ 西王母の桃の類なり

○霜桃 日本にいふ一此外種類多くなり又異品多くなり大なる一抱にも及ぶものあり

俳 桃の実の眠りも思ふ蓮の葉 桃つゝ桃の花又やたく 老人素一

狂 桃腮ふくらんで咲くるあるじ こゝあくのうちこそそらん 貞柳

詩 桃子五字對句

顆々粧霞媚 王母千年実
ヒトツヒトツ カスミニヨソホフ 王母ノ三千年ニヒトタビミノルモノヒヤ

園々帶露肥 素人幾代孫
ヘルヘトシテツユヲオビテコヘタルヘトシテテコエタリ シノ代ノ人ノ子代ノ子ゴノ人ニテオル外ノモノヒヤ

詩 事類賦

○果實多品 惟桃可佳 夭々其色 灼々其華 詩経ノ語ニテ花ノ見ルヲ云ヘリ○スベテクダモノ多シト云ドモ○為仙益壽 仙トナリ上ハ嫦娥ノ月ニ入タル故事ナリ壽ヲニストハ東方朔ガモヽクヌスミタル故事ヲ

○或制而袪邪 桃ヲ以テ邪鬼ヲサルト云故事和漢トモニ多シ

○或美后妃之德 女ノトクヲバコヽ桃ニ比シテ云故事多クアリ

○或報瓊瑤之華 玉ノカハリニ桃ヲヤラフト云フ故事アリ

皆詩経ノ故事ナリ

桃子故事

三偷

漢武帝ノ時東郡ヨリ短人ヲ献ス帝東方朔ヲ呼ンテ見セシム短人方朔ヲ見テ曰王母ガ桃ヲウエテ三千歳ニ一度實ヲムスブ此人其桃ヲ三度偷メリト云ヘリ 漢武故事ニ出

青花

山海経ニ曰磅礴山ハ扶桑ヲ去ル一五万里日ノ及バザル処ニテ其地寒シ桃ノ樹アリ千圍其花青黑シ万歳ニ一度ニノル

木瓜實

異名 鐵脚梨○楙蜀○是ハ甚サヽクハリノ種類ニテ實モ大体ニ似ヲリ又多くあるりのハ 櫨子そ

草木瓜　うり　林檎の
ゴ〜いぶきも味酸ー

槐花　六月末ヨリ七月ホ至テ黄花ヲ開クヨリ称ム

の木は種類ありて葉い夜る眠る
唐土ハいかへ槐を植て其下に
て訟を聽しと云日本にても
其遺風と志るし大臣の別名
と槐門と〻大納言を亜槐
と〻呼ぶなり

詩　槐花五字對句

槐之故事

植三槐　事文類聚ニ曰玉晋公拓手ヅカラ三

槐ヲ庭ニウエテ曰吾子孫カナラズ三公トナルモノアラントイヘリ

畫影篭青禁　縣古蟠根出
日中ノ葉ノカゲハキン　フルキアタニハワダカマツタ根カイヅル

秋香拂紫宸　城荒細葉殘
アキノハナノ白ヒハレレンデンヲハラフ　アレタルレロアトニハコヽカナハガノコツテアル

呆レテ然リ天下三槐ノ王氏トハイヘリ

蓮子飛　蓮の子を蔔と〻房の中ふあり此ろ自〻飛んで水中ふ入

能　華は実と志るも浸る的ク能州

狂　拾ホもかゝ〻ちめて墓と
くるれて人も京へ身ヨリ〻ク　宗惠

詩　蓮子詞　東坡

緑玉蜂房白玉蟑　折来滯
露復含烟　三トリイロノ玉カ蜂ノスノ中ニアリテ折テ

チミレハツエガコツテ又ケフリヲフクムヤウニエル

醉嚼新蓮一百圓　玻瓈盆面水漿底
アルガコトク見ユルヲ醉テ百ホドモカミタリト　ハリノ玉ノ盆ノ調味ノ汁ノソコニ

刀豆　一名挾剣豆。葛豆。

唐ハ赤ー日本ハ白ー

莢　ゑ〻こけ〻〻　蔓草ヨリ

能　拾さひて往むそく豆の恒根　宗因

△夕顔實。瓠。壺盧。ゆうがほ　も花白ー

(哥)夏　夕顔のたそかれ人むはさと名て社
そてなほ世のつねもさらぬ心ち

(俳)瓢簞は月を愛ぶ故歟然
酒を好ぶ人ハ号けあり　生瓢　支考

△青瓢簞　これ右ふ地なり　生ずるあのごとの
あをひさご

ゆうとゆうと世俗ふ青向かふ
人乃面色ふたとへ

(狂)病む新と表瓢簞と云ふれい
れ病疾病ふ有へし　貞左

△西瓜　此種ハ元西域より傳
へきたりて唐土にも漸
五代の時より始まり日本ハ慶
安中黄檗隠元入朝のとき
種と携へ来りて初めてなが
さきたるへし寒国ふハ生ずず

(俳)出女のに紅おしむ西瓜ふ支考
時明ふ法ケ世ふ西瓜ふ宗因

(狂)赤赤なるとふ西瓜ふ
西瓜ふとふ　海音

妙薬　衣服ふ名ごとのやふに
つきうる氏　落ふふ

△ひさご　近世畿内ふ種を
うしまふ味西瓜ふ

似て美なるしずず虎のうへよ穢
あり葉い蓮の葉ハ大ー蓮の
中空ふ有て蜀葵のごー

(哥)なにとこれ世ふぞゆへるあさこ瓜
ハ白つーなる名とちこひて　西行

(俳)あさこ瓜又非義人の仮なる　基中

棗　壺棗ハ上とる○要棗ハ大ー
て腰細ー○撮棗ハ小ーて

味酸ー此仁と茱物くすり漢土
よい数品あり本邦ふハ少ー

(俳)針ーもに牢ふ俳ー牢ふ露州
正ふ牢ふ牢ふ牢ふ牢ふ牢ふ遊来

(狂)ちくさて実ハ屋ふれい社の実と
うめめくさいいやつーあ　関刺

(詩) 枳五字對句

甜出諸餳上　今作中州瑞
アマキヲハモロ〳〵ノアタウヘニイデ　今デハ中ゴクノショウレキモノトナル

香居百果前　元從外國傳
カウバシキコトハサヽノクダモノヽヤ　モトヨリコヽロヨリツタヘキタツタモノニヤ

(詩) 枳詞 五言絶句

北園有三樹　布葉垂重陰
ホクエンアリイケリ　シイテハヲタレ

ソノ二一本ノ木ガアルガ一メンニ葉ガヒロガツテカサナルカゲガオホヒカヽルヤウナ

外雖多棘刺　内實有赤心
ホカニイバラノハリハ多ケレトモ　内ニハアカキ

アマキ心アリトナツメニタトヘテ人ノ外見ハニガ〳〵シクカラクハアレトモ　内心ハ清キコヽロナリ　赤心ハキヨキ心ヲ云ヘリ

粟穂　種類 秫。粱。糯。稌。又粟　奴〳〵

(哥) 万葉 あつ振神の社しるせいま幾日の叫へあるとまかはゝと

西米故事 生顧 神代巻 保食神のひいな生ぞろと見えり

少彦名神　神代巻少彦名神ハ甚短小の神なり

大巳貴命と共ニ国造りましく終ニ海路島ニ至り粟茎ニ縁のぼり茎の立生るニ弾れて常世の国ニ飛去りなりと云

稲葉の雲　稲の葉ハそよ〳〵おく〳〵見ゆるを云

(哥) 秋風ハ田面ニ多く吹ときは雲ニ成く通茂いなの雲ニ雲ニ成芭蕉

(俳) ようけすてそよ〳〵ハ移禁雲ニ成芭蕉

稲の花 異名 ○富蜘の花　○水影草

(哥) 夫木　後久我内大臣

夕〳〵ハいとやまなかの門田のいなの波乃花よりうちむすてハ小倉の山ニつむ熱ハそうる世のそこ哀の心　人丸

(俳) 蚊やとゝ〳〵毎ニつゝの花　五葉

△早田の稲　△さきだ

○そやくみのるものゝ

△早稲

(夫)天竺の上そのまさなをあそとゝ

縄くふくへてやり洗やくん

(俳)うせ[illegible]の麦や[illegible]の蕎麦[illegible]の乃　仝

△室の早稲　顕昭の袖中抄ニ

日むろの早苗うゑ

むろいむろけそこもとゝむ

ろのたやうせもよむとゝ

(夫)堀河百首　田子[illegible]苗とられい

老ふるゝ[illegible]人[illegible]

生類

七月の生類と集むとゝ

(八)(九)如此作[illegible]の八月又九

月にも用ひるものゝ

△初鷹狩　△小鷹狩　△初鷹狩

△三秋もも　△初鷹。むゝ　仝

郷の鷹狩ゝ冬い大鷹にて

大鳥とゝる秋い小鳥狩ゝ小

鷹とけふ。雑談抄小たゝ

雀鷂。小隼　鶏

なゝ○貞徳説ゝ鳥屋出の

鷹と居て初めて狩ゝるとゝ

と初鷹とゝ[illegible]も同ゝ

(夫)夫木　順徳院

著たゝのそやのくあきぢをみて

おのをもかくるゝ狩乃狩人

そやくゝる雲とゝふとゝあゝろの

狩かゝんとけ月ゝ一つ　衣笠大臣

(詞)ゝろてかゝ。ゆもぎゝひ。くみる。

落き。こかゝろ。つかさかまゝう。

屋とゝるゝ。どゝゝるゝ。月

ゝう。も花。よなを。うゝ

ゝる。雪ゝれ。秋い秋の枇杷

義ゝ仲の花ゝ[illegible]ゝよく合ゝ

(連)元ゝそさいの秋のあしゝ　肉桂

あすもゝんけいの花のく小鹿ゝう　宗祇

(俳)棹ゝてゝゝ[illegible]の[illegible]ゝ立甫

お興の[illegible]　後白

(狂)そゝしてまさそれゝそゝて大将ゝ

あゝゝゝれわゝかゝ多　木葉

△**鷹打**（八） 山中にて鷹を捕るを鷹打と云 そのたかをならしとりて多くは伊豫の國にてうる

△**荒鷹**（秋） 鷹を捕へていまだ人になれざるを云 則とりたるまゝの鷹なり

（俳）幌ひらく荒鷹[illegible] 其角

△**鳥屋勝** 四月より羽毛を替 七月上旬までに羽毛を元のごとくかへるを片鳥屋とも片鴾とも云 二年めを両鳥屋とし両鴾とも云 三年めを両片鴾といふ 初よりも羽毛全くそろひ勢ひよけれを鳥屋勝といへり 三才図会ニ出

△**鳩吹**（秋） 手を口にあてゝ鳩の声を真似してたかをとるなり 袖中抄ニ出たり

（俳）鳩ふくや[illegible] 東山

[illegible]鳩ふく妹の袖人を[illegible] 好忠

△**秋蛙** 秋も鳴く蛙之

（俳）人むれぬ蛙すく秋の[illegible]なり 桃青

（狂）[illegible]手にあまる[illegible]氷にすく蛙の秋乃夕ぐれ 貞柳

△**秋蠅**

（俳）風呂さきの窓とりけりや秋の蠅 鬼貫

△**秋蚊** △溢蚊 △残る蚊

（俳）秋の蚊や畳面より通 雷蛾

△**秋螢** 鈴鹿箱根などの山渓には八月比まで沢山に螢あり 併ながら冷気に至るされば螢まゝ消ぞ

○蚊蠅螢の類夏の部に異名等くわしくあるすゆゑぞ秋へのこる虫なり別に子細なし

（哥）ゆく螢雲の上まていぬべくは秋風ふくと雁につげこせ 業平

（俳）身退や螢も秋の天の川 入重

秋蟬（あきのせみ）

漢土ニテハ蟬ヲ秋ノモノトス

（宮）蟬遺（ゼンイ）　秋の初風（ハツカゼ）

（俳）月ハ出（イデ）テ山ハ木ノ葉（コノハ）　秋の月ハ長ク鳴ル蟬の哀ル

（狂）元禄（ゲンロク）ハ年々ヲ重ネ　みゝの秋の月ハ　一東

（詩）秋蟬五字對句

・容老愁城下（カクオヒテシウセイノカニ）　・小池兼鶴浄（シヤウチトヅルキヨク）

（ヒヾ人ガ手ヨリテ逢ヒ胃ノ愁ヒニモ息ヒランテ井ル）　（チヽサイ池ノ水イロハタヽハラクツルノ毛色トヒトシキ）

・蟬寒怨路傍（センサムフウロバウニ）　・古木帯蟬秋（コボクオビテセミアキニ）

（アキヲ過ミモサムソウナ声ニテミチバタニウラメシウニチク）　（古キ木ハセミノ声ニヨツテイヨヽ〳〵アキメレキニミユル）

（詩）全七字對句　詩礎

・萬頃白波迷（マンキヤウハクハメイ）　・白路鳥（ハクロニ）　・落日中（ラクジツノウチ）

（スエトラキナミノ上ニシラサギガ）　（ニラ日カゲノアタリ）

・一林黄葉送秋蟬（イチリンノクハウヨウオクルセミ）　・不知秋（ズシラアキヲ）

（一ツノ林ノイロ付タ木ノハガ秋ノ蟬ノ声ヲ送ルヤウニチリカヽル）　（アキヲ知ラズ）

蟬声驛路秋山裏（センセイヱキロニレウサンノウチ）　・噪暮蟬（サウボセン）

（セミノコヱヲキクタビノミチハアキ）　（ヒグラシノセミノヱ）

イヤ二ノナカニヤ　（ヒグラシガレイ）

草色河橋落照中（サウシヨクカキヤウラクシヤウチウ）　・漢宮秋（カンキウノアキ）

（クサノ色ノサビシイ河ノハシガ）　（キウ女ノモノ思フアキルアタリノアキノケシキ）

ユフ日カゲノ中ニヲエル

蜩（ひぐらし）

（一名）蟬虫（ゼンチウ）。蟬の種類（ルイ）。蜩蚻（ヒグラシ）。蟬蚻（ゼンヒ）。黒色（クロイロ）

（異名）蜩蚻（ヒグラシ）

或ハ青紫（アヲムラサキ）長さ一寸ばかり此せミハ夏鳴（ナク）多（オヽ）俗（ゾク）ようつくしよう〳〵と鳴

とゝのせミもなくなるもの

（俳）秋ふる揺ハ鳴しよう〳〵　素丈

茅蜩（いくらぶし）

（異名）△寒蟬（カンゼン）。茅蟬（ボウゼン）

○つゝの蟬より小さくて

青緑（アヲミドリ）の山中ふかくて　曉（アカツキ）

そゝり儀て名づく寒くなりて

尚（ナホ）よゝく其声聞（キヽ）くハ堪（タヘ）ず

（宮）夕立の雨もちまち晴ぬ夏の日ハ

かゝるくもの日ハ　の声　式子内親王

○古歌ハ夏ハ読ず連俳ハ秋ニ

連　日々しふ紫りの庭　秋の雨　肖柏

俳　日々しじや袴よりの子　終寺　遠兎貫

△秋胡蝶　毛虫或ハ芋虫などの化したるものなり

哥　源氏　若草の花嫁とさやかに笑ふ　秋をりむしのいろとくれるらん

俳　嫁こや今はるかいの業の色　東鈴

菜園の花ふかねや秋のてゝ　選二

狂　はるもあれはなもぜそ秋の菜畑　あやうく嫁のまゆくそする　樣賀

△田畑虫送　田蝗害をおくる

いなむし送るとも　つゝ

る時農夫大うるむしのかくと

つゝ鐘鼓と鳴らして野外ふ

送る又ハ松明と照らして田中と

呼るもあり むしの陰陽察ふ

余じて船岡山ゆもまつしあ

らしの事あり

△蜻蛉　和名のアキツバ　△胡黎。

ヱンボ○トンボ　△アキツムシ

△赤卒　△赤とんぼうの。あかやんま

○色やんま　○いぬまも大小あり

色と異ふするのくるりやんまハ

古言ふヱムハといひ通音あり

かげろふハ元陽炎の名なりこの

むし水辺の日かげふ飛ぶがゆへ

陽炎の名とハかりうるし

秋つむしといるハ物名なりて古

名なり次又故事あり

○胡黎　俗ムキトンボウ大うして

其緋なるゆゑ　と名づく俗

カ子ツケトンボともいふ

○古哥ふかゆるふとよとうる二ツ

あり一ツハ春乃紀ゆふの事一ツ

そこれむしの事なり

(ラ)後撰　秋はねのそろのふ弦ふ

神のちりやワりきこのくもん

俳　かゆるろひよ奥ねろ寺やなふ桃青

狂　おのゝ尾と猿ふ尾ふ　川花ひこゆるやんまよくなり　廓素

詩 仝七字對句

風定纖枝堪繫足 相逐戲
カセサダマリテセンシダヘリヤスルニアヒテ タガヒニオヒカケテタハムル
カセカヤンテカラニハホソイ
エダニモアレヲカラミヨイ

雨来密葉好藏身 鬪高飛
アメキタルテミツヨウ ヨレカタミニミラ タヽセタタカヒテ
アダカフツテクレバニゲキハノ中ニ クヒアフチタカ
ミヲカクレヨイ クトブ

詩礎

蜻蛉 日本紀神武紀 此
故事 一年夏四月巡幸

臀呫 日本と始めて秋津國と云ふ
とゝめ
ちゝのひ脇上の嗅間丘に登て國
の狀を望ませるひてのたまはく
あるあきやつしま国と獲ふ内
ゆふのまぢま国とつとも 猶蜻蛉の
臀呫ぜるがごとしとあり これより
○とゝめは此むしの尻をふり付て
ともに飛ぶなりとゝ

蟲 △虫の音 △虫の声。虫の題
△蟲 ふハ松虫 きりぐすをのるい
次ふ記す分ハいろ也もよりあり

哥 夫木 花山院

とゝろ合せるく虫のあるかなきちらせ
ひまもそそりかる秋のあるへう
家集 月前闘虫 清輔
めもあやふきあるを青れ月をふ
ゝきをりかる虫は聞えあ
新後撰 野虫 為氏
消秋のいろを惜みてとゝろくを
ふる色ハの人の心に聞ゝん
亀山 蟲虫 為世
神系なる芝のいろ枯れ夕つゆふ
消ゝきをりかる松むしのこゑ
詞 ちゝ。ちゝふ。ちゝりる。ちゝ
ちゝる草ハ ちゝむ。ちゝ。ちゝ
の秋ちけを蓬ハ ちゝ
若 浅茅ハ あちこちゞ系。庭のあぢち。
あちこちふ 垣ハ ちゝ恒 夜ハ ちゝれいを
ちゝ。鳴あ子。 ちゝを鳴。せき 夜
ちゝ。 垣ハ ちゝふ。ちゝ。ち。ち。
枕ふ ちゝ。枕ふ ちゝ床ハ 夜近き
独寝の枕 月ハ月の秋すゝ。ちゝ秋を

露ハ虫ノ涙ト云　露ハ涙ノ如ク虫ノ命ハ露ノ如ク
ハカナシ　ツユ　ナミダ　ムシ　イノチ　ツユ　ハカナシ

霜　秋の末より　風ハ秋の末より　秋空の風ハ高ク
感ハ秋ノ末ヨリ　秋空ノ風ハ高ク　ムシ

むしの声もうく。ひろう秋のなごり
をそめる。もろもろ　ムシ　コエ　ウク　ヒロウ　アキ　ノコリ　ソメル　モロモロ

連　風や秋深しき虫の声　肖柏
ヤ　アキ　フカシ　ムシ　コエ

俳　元弦の秋ふまぬ人の戸　其角
ゲン　アキ　フ　ヒト　ト

詩　虫詞五字對句

砌冷蟲喧壁客愁連蟋蟀
ミギリヒヤガニムシヒビクカベニ　タビ人ノモノオモヒハムシト共ニフカフナリ

蕭疎月到床亭古帶蕉葭
スダレニハラヒヲツキイタルトコロニ　チンガフルビテアシトヒトツニナル

詩　虫詞七言對句　詩礎

蒹葭堦色蒼々遠夜沈々
ケン　カ　カイ　シキ　ソウ　ソウ　エン　ヨ　チン　チン
アレハラノヨアクノタヽキガアヨクトヨクヒエ

蟋蟀秋声處々同月色深
シツ　ソツ　シウ　セイ　ショ　ショ　ドウ　ゲツ　シキ　シン
アキノムシコヱハイツクモオナジツキノイロモヨフカクミユル

虫撰　昔ハ殿上人さゞ野ゐど
へ遊遊しるひて虫を名
らくものひゝくくあり。松虫鈴
の類をゐ〳〵くして加茂の社司
〳〵奉〳〵〳〵事　禁祕抄ニ出

（三月）年中行事　忠頼

いろ〳〵ふさゝ冊の虫と女人乃
花をり衣ゐてそろるゐ

虫合　上ハ同〳〵　（俳）寂しさいとゞ
もれ〳〵すむ〳〵合　北庚

虫盡　殿上人乃虫合のこと
平家物語ハこの語あり

虫籠　今も猶加茂の社司よ
りいづるりの奇工目

をれどろ衣ろ
（俳）虫籠や蓋ろてそ林のゐるす　野水

虫売　（俳）むし〳〵うるこえ〳〵ふ
をてをろ〳〵　梅翁

蟲虫　○鑑虫　○鳴く声
馬のくつわの音

ふ似て故に名く。松虫。鈴虫。
蟋蟀の三種人々其音を尤賞す

哥 山家集　家隆

あはれとも人のゆかしの夕ぐれは
あはれとも人のゆかしの夕ぐれは
あはれとも人のゆかしの夕ぐれは

△月鈴虫

○金鈴虫とも云又月鈴児とも云色黒く少
〜〜黄く音はリンリンと鳴く

哥 秋きぬとそよぐ笹の葉の音に
秋風の吹くにつれて鳴く虫の声　慈光

詞 なるほど神なる山の松の音の
連 絶えぬ声やかれの果の哀　紹巴

△松虫

蛸とも云其音はチンチロリンと鳴く

哥 散木　俊頼

久かたの月の中なる松虫を
松虫なくなる秋の夕べ

付 秋の虫。むし。秋を。文明
ても。松虫はまつむしといふまつむしと
△人まつ虫。非まつ虫。

連 松虫も風ふきぬれば
能 松虫は鈴をふるなり秋の声　宗祇
○もと虫松虫の異名なり一説
なるもつい又松虫は声清亮
しなしいと加く松の音
似て松虫しつくも　○謡曲
野の宮の関は誰まつ虫の音を
んくとして風荒々しくうくや又
へが松虫はまんくとうくや又

狂 たさそふる秋の夕べの松むしの声貞徳
つまんくとなく松むしの声貞徳

右の外説多し上に圖する所は
畿内は人家籠の内に養ふ
処々尚國々水土のよりて大同小異有

△蟋蟀

一名莎鶏。ゑの九
○そでつ虫。ちろ虫
其音キリ〳〵スと鳴く二声三声七
舌つゞくるうこと　秋一〜八七十二
目小ゆ

○順和名鈔曰蟋蟀一名蛩。本
里木里須しろ加茂真淵の説

よへ蟋蟀ハ万葉ふ

哥 秋風之寒吹奈倍吾屋前之浅茅之本蟋蟀鳴毛

くさくさくさのふよりれい和名抄ふ蟋蟀とろろくすとよとなるい誤りにてくさのろぎとよむべきなり

恵慶

夜ふかひくさめろてきろくすなくあきをけい秋いきふろ

雪玉 早蛩鳴復歌 為氏

うのくれる和秋風のきろくくを まくこ床をきこきあるも移しし

詞 山蔭。秋さえの家。松のもと。くさのはくろ。はくてさせとなく。

連 ろろくすくすくぬるあるあきけふ肖柏

俳 岸灯やねちあてふきろくす岩

促織

一名 斯螽。翅織 俗ふてくくとふ

蟋蟀もちとろとふくも此斯冬蝨もちとろと云へ蟋蟀鳴声

もとろる如くキリくとつふ故音ふ依て名づく此斯冬蝨ハ狀乃俳諧ふよりて名つくる

哥 金葉 さかれ糸ーろる芝ひ

ちとあるひれ者きこ為

詞 者のあきと御る。ちて御る壮の

哥いそく。業ちてこ。萩のみき

哥のたて者のぬき。御ろる。山の陰

蚣蟴

一名 蜻蛉。形蝗ハ似て光あり 翅角あり 夏生ー秋ふいて鳴 三才図会ニ出ル 順和名抄ニ出

○蜻蛉。古保呂木ろうし

○千梅の説ふハいろ

俳 かふろぎやそれひ壮を 槌山

竈馬

附狀 促織ハ似て稍小へ脚長く好んて竈の傍ハ鳴故ハ竈馬と云 漢名 竈雞。好事の人是とキリくすと考へ云ハ誤へ

俳 打ちハ出きあれ衣ふいくく引 槌の海ぬきれて鳴やむいくく 馬黒

㊀きりぎりす。こゝろぎ。えんろぎ。の三虫同類みて和漢ともに別詳なるべし詩経に五月斯螽動股六月莎雞振羽七月在野八月在宇九月在戸十月蟋蟀入我牀下とあり朱子注に三虫一物にして時々変化して其名と異なることあり

稲虫　八月稲の穂に委しきもの多く七月とす

阜螽　此虫性不嫉雄虫数虫つるむ一母百子故に五百子式又此虫一夏に子を百生ずる故に五百子云

㊁門前の草に進出でいるる虫也

蕉虫　㊁蕉虫乃至る一名や某小母友

蓑虫鳴　漢名蓑衣虫○草虫○壁債虫○螺○このむしといひて季とせんこのむしをとれば秋に清少納言の詞の音聞知りて八月ごろにな

きば父よくこゝろぎ

いみくあれ

㊁蟋蟀の名也秋風のもものむみの声　寂蓮

詞　ちろろの虫ともいふ

㊁この虫ちろろと鳴く虫なり

馬追虫　田家にて人家近く鳴く声牛馬を追ふがごとし

稲蟲　○叩頭虫ともいふ又

藻鳴虫　△藻住虫の音。㊁俳

形緑色にして頭尖り社人の烏帽子着るに似れい俗に称宜しつゝ又両足の高さとゝのれい身と伸して稲とぎくが如く動くなりゆへよりつき虫もいふ

△藻住虫の音。㊁俳

ふるいこと多くよ

ろう藻ニ付て殼の一片ある螺之
れからしいへハ分殼の意なり
○又刈ろう藻ニ付て居て此虫我々
と身を亡を故ニ名づく　古今雅俗
奇なる多くあつれども読り
言　古今の名ハ人の経験の我うと
孫とてそなるあ世さいうしに　典侍
俳　ちれ〳〵と喪ニ経人の流るあ　嵐雪

蚯蚓鳴

（異名）蟋蟀○寒く蛩○陽頭○土龍○歌女

みゝをい目不見の訓ろう鳴く
聲ちるなど清く節とふくこと
雨ふれい出る晴ハ必夜鳴く
俳　秋ハ五ツのかゝ人ハ多て今くゝすれ　鬼貫
狂　わろいこふいくゝ　ぬ　ちゝ
うなふゝすの秋もようへ　蛩

蟷螂

（異名）折父○蝕肘○蚣○不過○斧○好人
肱とる故ニいゝ　ひ　ひ　の名お
ろ暑ーていろ　ア　ゝ

俳　さろ〳〵神さ〳〵れそなる
樵夫懐柳ろ斧紙ろ
狂　蟷螂ろ斧とあり　戦切
たゝすもちゝの苦のちゝ　流半

蟷螂　故事

拒車

齊ノ荘公出テ臘ス蟷螂車の音と
聞テ斧ヲ振テコレニ向フ荘公コ
レヲ御者ニ問フ答テ曰ク蟷螂ナ
リ此ハ進ムヿヲ知テカヲ量ラズ
レテ敵ヲ軽ンズルモノ也王曰コレ
勇アル虫ナリトテ車ヲ廻シテコ
レヲ避ケタリ四海ノ勇士勇ヲ
賞セラレタルヲ傳ヘ聞テミナ
齊ニ帰レテ国甚強シト　云式

常

此ハ　のやまひに
ろ　盗みわ
生　の事養
理とろす

必用

一ケ月

樂事

風涼しく快ー○虫の
音あいをいちづゆ

ものゝ葉もかれ〳〵なるけしき夜ゝ〳〵野辺に出て稲葉露の
うるおひ稲の穂の出て青〻と
て風にそよ〳〵けしき遠く
のぞめば平々〳〵て面白し

破軍向方

夜九ツ 戌の方	夜八ツ 亥の方	夜七ツ 子の方	
朝六ツ 丑の方	朝五ツ 寅の方	昼四ツ 卯の方	
昼九ツ 辰の方	昼八ツ 巳の方	昼七ツ 午の方	
暮六ツ 未の方	夜五ツ 申の方	夜四ツ 酉の方	

日刻 ○未日申日○未刻申刻事を
うるゝに用ゆべし

方角 ○家普請他行東北の
方に向て出て南に太凶

天氣占候 卯の日三ツあれば
月の内に虹あらば米
野菜共にすべし

衣服式

帷子を着る式の式へ袴の色

萩重 表 裏薄紫 花薄 裏白

裏すゝれいろ
上つゝさいに右の色を召

女衣服 白帷子を着る式
上前は白あげの
かさびらに梶の葉あるひは草
のをゆうまくに萩萩をゑ
はものうえにうるはしたもの

養生 夜漸く冷
衣を厚くし涼風を
やぶらるゝ事なれ夏の間は
勝理ひらけ表気すくして
風に感じやすし或は感冒傷
寒痰喘息の病をうる
慎んでこれをさくべし
○此比うすび
刻ませんじ凍疥を洗そは

飲食

七月一ヶ月の食物の慰ふる色出す

燒米 糯米の青稻を炒りて搗き簸て籾を去るべし米ひらたくうて味甚美なり 糯米もよい味

劣仁 蜻蛉日記ふやいこめしあり

(俳) 燒米やきえんてまつる橋の脚 西更

切麥 ◇ある麥◇あつむぎ。ひやむぎ 夏六月ふ出す

○ひや麦いあ〜いいうる物ゐいまるこ 詳るべず今いの作えし

い細き溫飩をひや中 喰ふと いうり又ゆる麥い冷ぜえ いつふが

むぐ〜あり麥い煮てあつき

といふる職人哥合ふ

(ラ) てうさいのこうきのうへのあつ麦いむ〜あけのせ〜ん月ゆるるる

○むーあげの瀬戸い備へうる膳の蓮二

(俳) 切麦やあしたはうる

七月飲食 並 料理 南立

禁物 雁肉 思邈云此月食へい神を破る 又礼記ふ此月食へい

忌物 益あ〜ゑ○蓴菜 李延云七月蟲多く著く此を食へい霍乱ぜむ

好物 胡麻と食べし 陶弘景云 摂生論云出う

料理

汁 塩ぐるまり 塩ぐるまり ほと略 めうど ゆ

清汁 午房さがき ふぐりもも れ家 ゆの皮

膾 鮑 貝 ぐ

煮物

差味

和會物

吸物

精進

汁

膾

差味

白うり いかさけ ゆで　たこ［illegible］ 志ゐ［illegible］ いり酒

菊の葉あげ せうれんぢく ゆりね　ひげ大こん・こうたけ もす からしみそを

なすび かんてん まつたけ ふ しいたけ　いとこんにやく うこぎ せうが いり酒

煮物

かすてらあげ まつたけ 葉付かぶ　土佐ふ くろくわい ぶどう

かも玉九むき いも 功麸 ふくべ うすくず　新いも 茸 粒みそ あんかけ

根いも ゆりね こさい　志きじ とうせんくわ 岩たけ　ぜんまい ねぎ ひらたけ

和會物

ぎんなん・きくらげ 玉子 せうが 志そ あん　ぬきみ ごまみそ あん　浄新づき ゆりね ごまみそ　まんまん 岩たけ 梅みそ あん

あげふ さゝげ たで あん　ひともじ・ねぎ ゑんどう・くるみ ごまあん

くり・木くらげ 白ごまみそ

日本歳時記　全三冊

先年貝原先生作の日本歳時記四冊を畫出して山右衛門父子月令博物筌に拾遺と号して出す。土用の［illegible］節分祭の［illegible］雅俗の好まぬ［illegible］ものなく記し［illegible］俳諧の便りとす

博物筌　小本　合本一冊

此本は神社佛閣人物草木魚鳥［illegible］天地の間のあらゆる物を委しく出し［illegible］もイロハ分にして（イ）の部を見れば天の部、電。猪子。神の名は伊弉冉大神宮。出雲大社。人の名は医者の祖一休の行状。其外古来奥義の秘事まで小雅しく出し、神社は神事祭礼故事の本をあらく悉く記したる書

神佛祭礼記　小本一冊

日本国中神社の祭礼佛家の縁日紀律を集め故事来歴をあらはす。平がなにて絵入なり